月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.17



《執行者》としてのレンと
対峙したエステルは…!?
空の軌跡外伝 レーヴェ物語

コミックスは7月19日発売！
みんな集まれ！ファルコム学園

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏

「ルーアン」編は切なくも甘い物語!?
英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

ダドリーの本気が今ここに！
英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

『イース セルセタの樹海』の最新情報が到着！

ファルコムjdkバンドドラマー：オカジの
人生半キャラずらし

Falcom FanArt Collection

お待たせしました！『エリィ編』がついにスタート！

英雄伝説 零の軌跡 ショートストーリーズ



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～



著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶

第5話 『ダドリーとバースデーパーティー』

かすかに薬品のニオイがただよっている。

ロイドは特務支援課の仲間たち――エリィ、ティオ、ランディとともにウルスラ病院を訪れていた。

中庭や受付に、いつもより多くの患者や見舞客の姿がある。

「なんだか、あわただしい感じがするな……」

「あれだけ大きな事件だったんだもの。無理もないわ」

エリィの言葉に、ティオもうなずいた。

「……市民だけでなく、警察や警備隊からも大勢の被害者が出ていますから」

「そうだな」

ロイドは先日の大規模な事件を思い出して、しばらく目を伏せた。

ランディが「おっ」と声をあげ、ブンブンと手を振る。

「セシルさん、こんちわッス！」

顔をあげたロイドは、栗色の髪の女性セシル・ノイエスがやってくるのを見つけた。

彼女は病院の看護師チーフという立場で、今もナース服に身を包んでいる。

ロイドとは実の姉弟（きょうだい）のような仲だ。

「こんにちは、セシル姉」

「あら、ロイドじゃないの！　それに、みなさんも……今日は、お仕事？」

「うん。入院しているルバーチェ商会の人たちから話を聞きたいんだけど……できるかな？」

セシルが思案顔になる。

「そうね……何人かは、もう話をするくらいなら大丈夫だと思うわ。念のため、先生に確認してみるけど」

「よかった」

「ありがとうございます、セシルさん」

「……お仕事中にすみません」

エリィとティオが丁寧に頭をさげると、セシルがひらひらと手を振って返す。

「気にしなくていいのよ。これも仕事のうちだから」

「さすがです……」

妙なところで感心するティオだった。

ランディが身を乗り出す。

「セシルさん、お仕事、大変そうッスね！」

「ぜんぜん平気よ、と言いたいところだけど……これだけ患者さんが増えるとね」

「俺でよかったら気晴らしに付き合いますよ！」

「ラ、ランディ、なに言ってんだ……!?」

ロイドは女性関係に奔放な友人の襟をつまんで、猫つかみで引っ張る。

セシルは笑っていたが、エリィとティオはいつものようにジト目になっていた。

「まったく、ランディは……」

「……ダメダメですね」

案内してくれるセシルについて行き、まずは担当医師の部屋に向かう。

その途中で、彼女がうれしそうに教えてくれた。

「今朝、先生がおっしゃってたんだけど……症状が軽い患者さんのなかには、そろそろ退院できる人もいるのよ。警備隊の方とか」

「そうなんだ。よかった」

「ふふ、本当にね。リハビリはしてもらう必要があるけれど、ちゃんと元通りに回復できるらしいわ」

「なるほど。それなら……あ……」

廊下で、見知った相手とすれ違う。

軽くウェーブのかかった金色の髪に、エメラルド色の瞳の女性だった。

一瞬、目が合ったかと思ったが、相手は気づかなかったかのように通り過ぎてしまう。

警備隊の制服ではなく、病院服を着ていたから、すぐにはわからなかったが、彼女は――

振り返ると、ランディが気まずそうな顔をして肩をすくめた。

「ランディ、今のは、ミレイユ准尉だよな？」

「ああ、そうだな……」

「声くらいかけたらいいんじゃないか？　その……親しくしてるんだろ？」

「なぁに、元同僚ってだけさ……まぁ、あいつは、これしきのことで参っちまうほどヤワじゃねえから心配するな」
「そうか……ランディがそう言うなら……」
金色の髪の女性は、廊下の先にある扉へと入っていた。
オホンッ、とエリィが咳払いする。
「レディがシャワー室に入るのをじっと見てるなんて、恥ずかしいことしないの」
「えっ!?」
ロイドは赤面し、そんなつもりはなかったと釈明するのだった。

担当医師の許可を取ってから、ルバーチェ商会の者たちの話を聞き、知り合いを見舞って、受付へと戻ってきた。
「ありがとう、セシル姉。助かったよ」
「どういたしまして。ところで、もうすぐお昼だけど、ロイドたち、ご飯（ランチ）はどうするの?」
「とくに決めてなかったけど……」
「私、そろそろ休憩の時間だから、よかったら一緒にどうかしら?」
「そうだね」
「おっ、いいッスね!」
ランディが話に乗って、エリィとティオも異存はなさそうだ。
それでは、とウルスラ病院にあるオーベルジュ《レクチェ》へ向かおうとした。
そのとき――
「む、特務支援課か」
精悍な顔つきと、黒縁のメガネが印象的な、いかにも几帳面そうな男性が、ロイドたちのほうへと歩いてくる。
肩幅のある身体を背広（スーツ）に包んでおり、きちんとネクタイで締めていた。
「あ、ダドリー捜査官!」
やってきたのは、クロスベル警察の捜査一課に所属するエリート捜査官、アレックス・ダドリーであった。
ティオが「……メガネスーツです」とつぶやき、ジロッと睨まれる。
「ふん。バニングス、またなにかあったのか?」
詰問するような口調だが、べつに疑っているとか怒っているとか、そういうことではなく、これが彼の地である。
ロイドは苦笑しながら頭をかいた。
「いえ、先日の事件の経緯を詳しく報告するために、関係者から話を聞いてるだけで……とくに変わったことは起きてません」

「そうか。ならばいいのだがな」
「はは……いくら俺たちでも、そうそう大きな事件に当たったりはしませんから」
「そう思うのなら、お前たちが、ここ数ヶ月で解決してきた事件の報告書を見直してみることだ」
「報告書ですか……?」
「いくつもの大きな事件を解決していることを……忘れたわけではあるまい」
ダドリーは仏頂面のままだったが、どうやら、支援課のことは評価してくれているらしい。
ティオが「……ツンデレです」とつぶやき、また睨まれた。
ロイドたちは苦笑する。
「えっと……ダドリー捜査官は、なにかあったんですか?」
「当然、仕事で来たのだ。詳しいことは捜査上の機密だから教えることはできないが……それより、お前たちはまだ病院に用事があるのか?」
「いえ、もう終わりましたけど……」
「そうか。であれば、早く次の支援要請に取りかかることだ……私は特務支援課の成果をあるていど評価している。成果をあげた者には実力があると判断する。そして、実力がある者は、さらなる成果をあげるべき――というのが私の考えだ」
「な、なるほど……!!」
元々生真面目なところのあるロイドは納得してうなずいた。感銘を受けたと言ってもいい。
しかし、マイペース派のランディは、ため息で応じる。
ティオも「……回し車のなかを走るハムスターみたいです」とこぼして、またダドリーに睨まれてしまった。
ダドリーが号令する。
「まだこの街（クロスベル）は多くの問題を抱えている。お前たちは実力を示した。であれば、相応の働きをするのが義務だ!」
「は、はい!!」
追い立てられるように、ロイドたちはウルスラ病院を出る。
セシルが手を振って見送ってくれた。
「お昼は、また今度ね。がんばって、ロイド。みなさんも」
「はは……ごめんね、セシル姉。また来るよ!」
「くぅ～、セシルさんとのランチが……」
ランディがこれ以上なく肩を落としていた。
バス停に向かう途中――
ティオが唇を尖らせる。
「……支援要請に応えるのは望むところですが……ツンデレメガネスーツは堅物すぎます」
「仕方ないわね。お昼はクロスベル市内で取りましょう」
エリィがなだめる。

ロイドも、ひさしぶりに会ったセシルとの昼食は残念だったけれど——ダドリー捜査官の職務に打ちこむ姿に、尊敬の念を抱いていた。

「俺たちも全力を尽くしてるつもりだけど、ダドリー捜査官は本当にすごいと思うよ。兄貴とは違った意味で目標だし、学ぶべきところも多い」

エリィがうなずいた。

「そうね……ロイドのお兄さんも、とても仕事熱心だったんでしょう？」

「うん。仕事なのか遊びなのか、わからないようなときもあったけど」

「ふふ、型破りな人だったみたいね」

「今にして思うと、あれは情報収集だったのかな。ときどき兄貴はカジノやバーで盛りあがって朝帰りして、セシル姉に心配されてたよ」

「そういえば、ロイドのお兄さんと、セシルさんは……」

エリィの表情が、わずかに陰る。

「ああ……」

ロイドの兄ガイ・バニングスと、セシルは婚約していた。

そして、彼女は今でも亡くなったガイのことを想いつづけているようだ。

ロイドは青い空を見上げる。

「俺は、いつか兄貴に追いつけるのかな？」



くいっ、とダドリーはメガネを直す。

ロイドたち特務支援課を見送っていた看護師——セシルへと視線を向けた。

「騒がしくして申し訳ない。仕事柄か、どうも声が大きいようだ」

「ふふ、大丈夫でしたよ。いつもお忙しそうですね、ダドリーさん」

「これでも、だいぶ落ち着きました。病院のほうこそ患者が増えて大変でしょう」

「似たようなものです。数日前に比べたらよくなりました。ダドリーさん、今日はお仕事ですか？」

「警備隊の一部が退院できそうだと聞きまして」

「あら、耳が早いですね」

「それも仕事のひとつですから。面会することはできそうですか？」

「大丈夫だと思いますよ。一応、私も同席しますね」

「ご協力、感謝します」

ウルスラ病院３１８号室——

「なるほど……隊員たちが集められ、上官から直接、手渡されたわけだな？」

「はい」

金色の髪の女性が、はっきりと答えた。

後遺症はあるらしいが、もう話しているだけなら、影響は感じられない。

彼女はベッドに腰掛けて、ダドリーは向かい合う形でパイプ椅子に座っていた。

「そのとき、拒否した者は？」

「いませんでした。命令を疑っていては私たちの組織は成り立ちません」

「ふむ」

病室の扉が開かれる。ガラガラと台車を押して、ナースがひとり入ってきた。

「こんにちは～。ミレイユさん、お昼ですよ～」

もうそんな時間か——とダドリーは腕時計に目を落とした。

セシルが声をかける。

「おつかれさま、シロンさん」

「あ、セシルさん、おつかれさまです～!!」

「ここは、私がやっておくわ」

「だいじょうぶですよ～、まかせてください！　ミレイユさん、お食事で～す！」

差し出されたトレーには、特別な治療なのかと思うくらい小さな器に、少ない食事が載っていた。

ミレイユが眉をしかめる。

「…………いただきます」

しかし、不服など言わずに受け取った。

ちょっと待って——とセシルが止める。

「シロンさん、これシズクちゃんのぶんじゃない!?」

「あれ？　ああ、間違えちゃいました～!!」

「では、私のは……？」

「あはは、こっちです、こっちです。ごめんなさ～い！」

「……シロンさん、本当に大丈夫？」

「もちろんです、セシルさん！　いつまでも失敗ばかりしてられませんよ～」

ダドリーは捜査手帳を開く。

（ふむ……明らかに子供用のメニューを出されても、文句ひとつ言わないか。彼女の証言は、あるていど信用してよさそうだな）

さらさら、とメモを書きこんだ。

パイプ椅子から立ちあがる。

「では、このへんで失礼するとしよう。ミレイユ准尉、調査

書作成の協力、感謝する」
「もういいんですか？」
「入院患者の食事を邪魔するつもりはないのでな」
「わかりました……なにか気になることがあれば、またいくらでも聞いてください。司令部からも、可能なかぎり捜査に協力するよう言われています」
「了解した。それでは」
　ダドリーが敬礼し、ミレイユもベッドに腰掛けたままではあるが、敬礼を返した。

　病室を出ると、一緒に退室したセシルが尋ねてくる。
「これで終わりですか？」
「ええ」
「そうですか。ダドリーさんは、お昼はどうされるんですか？」
「昼食か……とくに考えていないが……」
「ふふ、警察の方って、みなさんその調子ですね。ちゃんと三食を規則正しく取らないと、体を壊してしまいますよ」
「これは、面目ない」
　思わぬところで注意されてしまった。
　たしかに、忙しいと食事を抜くことも多くなる。いざというときのためにも、できるときは規則正しい食生活を心がけるべきだろう。
　セシルが優しげな笑みを浮かべる。
「ふふ……ロイドもすぐ食事を抜くんですよ。無理しないように言ってるのに……ガイさんも同じでした。一生懸命なのはわかるのですけれど」
「そうですか。あいつらも……」
「でも、なにをするにも健康でないと。そのために、食事は大切だと思うんです」
「心に留めておきます」
「ダドリーさん、よかったら《レクチェ》で、ご一緒しませんか？」
「え……？」
「私も、今から休憩に入りますから」
「あ、いや、私ですか……？」
「もしかして、急ぎの用事がありましたか？」
「いえ、今日は本当は非番なので」
　民間企業風にいえば、休日出勤とかサービス出社とか、そういう形だった。
　だからこそ、市街を離れて病院まで来ることができたという面もある。
　ダドリーは思案した。
（ひとりでサンドイッチでも食べたほうが早く食事を終えられるが……このセシル・ノイエス嬢は、ウルスラ病院の看護師チーフで、今回の被害者たちと長く接している。思わぬ情報が得られるかもしれんな）
「ふふ、もしかして、またお仕事のことを考えてますか？」
「あ、その……」
「仕方ありませんよね、警察官なんですから」
「……そうですね。でも、お食事はご一緒させてもらえますか」
「はい」



　ウルスラ病院オーベルジュ《レクチェ》――
　ダドリーは、セシルと同じ〝特製ビーフシチュー〟を食べた。彼女がお勧めするだけあって、野菜が豊富で、味もなかなかのものだった。
　食後のコーヒーも文句なしだ。
　セシルが微笑みかける。
「どうでしたか？」
「美味しかったです。それに、いろいろと知らなかった話も聞けましたし」
「お役に立ちますか？」
「捜査に直接関係があるかはわかりません……しかし、こういったことの積み重ねが大切だと思います」
　症状の経過や、患者たちの精神状態や、効果のあったケアなど、有意義な情報だといえる。
「ふふ……よかったです」
　笑顔の温かい女性だな、とダドリーは思った。
　そのとき、隣の席で甲高い声があがる。
「きゃ～、このケーキ美味しいわ～!!　リンも食べればいいのに♪」
「いいっての。私が甘いの苦手なの、エオリアだって知ってるだろ？」
「こんなに美味しいのに～。この味が楽しめないなんて、リンってば可哀想～」
「また太るよ……？」
「ひどい！　お姉さん、泣いちゃうわ！」
　騒がしい。
　ダドリーは眉をひそめた。
（リンにエオリア……クロスベル の遊撃士たちか……）
　警察こそが市民を守る組織だというプライドを持っているので、『民間人の保護』を掲げる民間団体――遊撃士教会（ブレイサーギルド）には強い対抗心を抱いているのだ。
　とはいえ、病院で揉めるつもりはないが。
　彼女たちの会話が聞こえたのか、セシルがメニューを見せてくる。

英雄伝説 零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

「ここのお店、ケーキも美味しいんです。カロリー控えめでも味を落とさないのがポリシーだとか」
「いや、私は甘いものは……」
「苦手ですか？」
「そ、そうですね。甘くないケーキならいいのですが……」
「くすっ……あ、ごめんなさい。ちょっと思い出したことがあったもので」
「思い出したこと？　なんですか？」
「昔のことです。聞いても、お役には立たないと思いますけど……」
「どんなことですか？」
「本当に、たわいない話ですよ──私、初めて大きなケーキを作ったとき、レシピを間違えてしまって……まったく甘くないケーキになっちゃったんです。むしろ、しょっぱいくらいの！　それなのに、味見したガイさんは、美味しいって言ってくれて」
「……あいつらしいな」
「ふふ、てっきり、優しさからお世辞を言ってくれたんだと思ったんです。ところが、本気で美味しいと思ったみたいで」
「え？」
「なんと、上司のお誕生日に持って行っちゃったんですよ」
「そ、それは……あいつらしいな！」
「うふふ……びっくりしちゃいました」
「大丈夫だったんですか？」
「そのときの上司は、セルゲイさんでしたから。結局、アリオスさんと三人で、ぜんぜん甘くないケーキを食べたみたいですよ」
「なるほど……」
　セシルが作ったのだと嬉しそうにしているガイを前に、微妙な味のケーキを黙々と食べるセルゲイとアリオスの姿が目に浮かぶ。
「どーだい、この甘くないケーキは！　イケてるだろ!?」
「お、おう……まぁ、斬新ではあるな……」
「…………………うむ」
　思わず笑いがこみあげた。
　あまり表情を出さないダドリーだが、唇の端が引きつってしまう。
　セシルはころころ笑っていた。
「そういえば、ちょうど、この時期だったかしら……？」
「ん？　セルゲイさんの誕生日ですか？」
　ダドリーは手帳を開いた。

　わざわざ日付に丸を付けるようなことはしていないが、警察関係者のプロフィールは控えてある。
「本当だ。今日だったのか……」
「あら、それじゃあ、お祝いしたいですね」
「うーむ……」
　特務支援課も忙しいだろう、とは思うが──
（忘れて過ぎていたならともかく……気付いたのに、なにもしないのは落ち着かないな）
　セシルが珍しく身を乗り出す。
「ロイドたち、パーティとかするのかしら？」
「まさか。仮にも警察署で……いや、支援課（あいつら）のことだからな」
「ふふ……ロイドもお世話になってるし、急患が入らなければ、夕方にお祝いを持って行くくらいしようかしら」
「……そうですね」
「なにかするのか、ロイドに聞けるといいのだけれど……あ、そろそろ、休憩の時間が終わりみたいです」
「それでは、私も失礼します」
　ダドリーは病棟に戻っていくセシルを見送る。
　ふと、隣の席を見ると、難しい顔して書類と睨めっこしているリンの横で、エオリアが三つ目のケーキに手をつけていた。
「うふふ～♪　低カロリーだから、だいじょうぶ～♪」
（それは無理だ！）



　クロスベルに戻ったダドリーは、百貨店《タイムズ》に立ち寄った。
　中央広場にあり、ふたつの針がぐるぐる回る看板が目印の総合小売店で、高級品から日用雑貨まで幅広く取り扱っている。
　入口から階段へ向かう棚に、みっしぃグッズが売っていた。
『プレゼントにも最適！』とポップにはあるものの。
（うーむ……さすがに、これをセルゲイさんにプレゼントするのは、ありえないな）
　二階にあがり、いつも利用している靴屋に顔を出した。
　この店では、年に何度か革靴を仕立てている。
　仕事柄、すぐに靴がダメになってしまうからだ。同僚にはスニーカーを履く者もいるが──捜査官ならスーツと革靴だろう、とダドリーは信じている。
　店主のハンソンが、にこやかな笑みで迎えた。
「おおっ、いらっしゃいませ、ダドリー様。また新しい革素材が入荷しました。ぜひ見ていってください」
「ほう……」

「どうですか、この革の艶は？　帝国方面から入ってきたばかりの品でして。なかなか珍しいですよ」
「むむ、たしかに……この革でオーダーメイドの革靴を作ったら……あ、いや、今日は知り合いへの贈り物を探しているところでな」
「贈り物ですか？　サイズは、おいくつでしょうか？」
「それは……」
　手帳を開いてみたが、セルゲイのプロフィールに足のサイズまでは書かれていなかった。
　ため息をつく。
（さすがに、そこまでは調べてなかったか……足に合わせて仕立てた革靴を履いたときの、あの雲のうえを歩くような心地よさを、セルゲイさんにも味わってもらいたかったが！）
　残念ではあったが、当てずっぽうに用意できるものではない。
「すまん。邪魔したな……また寄らせてもらう」
「お待ちしております」
　ダドリーはアクセサリーなどを扱っているコーナーを見てみることにした。
「うーむ……」
　並んでいる商品に視線を巡らせる。
　ネクタイやタイピンは『肌身離さず』という意味合いから、恋人が贈る物らしい。衣服なども同じだ。
　ハンカチは『別れ』の意味があるのだとか。
　時計は『勤勉をうながす』という意味があるらしく、目上に対しては失礼になる。
「えぇい！　意味がない贈り物はないのか⁉」
「お客様、いかがなさいましたか？」
　店主のベイカーが声をかけてきた。孫もいるという初老の男だ。
「いや……職場の上司が誕生日なのでな」
「なるほど、ダドリー様のご職業でしたら、署名される機会も多いでしょう。万年筆などはいかがですか？」
「万年筆か……なるほど、さすがだな」
「畏れ入ります。種類はいろいろありますが……これなど、熱烈な愛好家がおり、あのクロスベル国際銀行の総裁ディーター・クロイス様もお使いだとか」
「ほほう」
「お値段は、それなりですが」
「ふむ……なに、これくらいの手持ちはある。包んでくれ」
「有り難うございます」
　初老の男が、うやうやしく頭を垂れた。



　プレゼントを持って、ダドリーは特務支援課のビルへと向かった。
　ロイドたちは飛び回っているが、課長であるセルゲイは、支援課ビルにいることが多い。
　玄関扉を開ける。
　ソファーの置かれた応接スペースには、巨大な白狼が寝そべっていた。
「グルル……ゥ……」
　ツァイトが片目を開いてダドリーのことを睨み、また目を閉じる。
（……入ってもいい、ということか？　番犬というには強烈すぎますよ、セルゲイさん）
「失礼する」
　ダドリーが特務支援課のビルに入ると、厨房になっている部屋から赤毛の青年――ランディが「ん？　お客さんか？」と顔を出した。
「げっ⁉」
　という声をあげて、げっ⁉　という顔をして、すぐに引っこむ。
「うおっ、お、おい！　ロイド！　やばいぞ……」
「……えっ⁉　ダドリー捜査官だって⁉」
　そんな会話が聞こえてきた。さらに、女性陣の声も。
「げっ……という感じですね……」
「うーん、ちゃんと話せばわかってくれるんじゃないかしら？悪いことをしてるわけではないのだし」
「ねーねーロイド、どうしたの？」
　ティオとエリィと、幼い女の子の声まで聞こえてきた。
　ダドリーは眉をひそめる。
（やれやれ、なにをしているんだ、支援課の連中は？　セルゲイさんにプレゼントを渡して早く帰るか……）
　課長室へと足を向けた。
　そのとき――
　エニグマの着信音があがる。
　ダドリーは反射的に胸元に手をやったが、この音は自分のものではない。
　厨房からロイドの声が聞こえてきた。
「はい！　えっ⁉　ああ……そうか。わかった……いや、それが支援要請なら、俺たちは受けさせてもらうよ！　場所を教えてくれ。詳しいことは依頼者から聞く」
　通話を終えたロイドと、支援課の面々が厨房から出てきた。
「おつかれさまです、ダドリー捜査官！　すみませんが、今

から――」
「事件か、バニングス⁉」
「はい！　〝いなくなった飼い犬を探して欲しい〟という支援要請です！」
「ッ⁉　い、犬か……」
「犬です。行ってきます！」
　ロイドが走って玄関へと向かう。
「あ、ああ……」
　さすがに休日を犬探しに捧げる気にはなれないダドリーだった。
　ティオとエリィが、ロイドに続く。
「……どんな犬でしょうか？　わたし的には、まふまふできる長毛の大型犬が好みですが……」
「ん～、私は部屋の中で飼える小型犬が好みかしら？」
　最後に「しゃあねえな～」と文句を言いつつランディが出ていく。
「気をつけてね～」
　厨房から顔を出して、ライムグリーンの髪の幼い女の子が小さな手を大きく振っていた。

　ロイドたち四人が出動し、支援課ビルにはダドリーと、その幼い女の子――キーアだけが残された。
　ずっと寝ているツァイトもいるが。
　キーアの大きな瞳に、じっと見つめられる。
「えへへ、こんにちは！」
「うむ……留守番か。大変だな」
「キーアはへいきだよ」
「いつも、こうなのか？」
「ん～、だいたいこんなかんじ。ロイドたち忙しいから」
「そうだな……」
　やはり子どもを育てる環境としては不適切ではないか――と感じるダドリーだが、それでも、当のキーア本人がロイドたちの元に留まることを望んでいるらしい。
（……そういえば、バニングス兄弟も似たような境遇だったか。どんな場所が幸せかは人それぞれかもしれないな）
　キーアのことを見つめていると、『？』を浮かべて首をかしげられた。
「どうしたの？　ダドリー、今日もぶすっとしてるね」
「ぐっ……別にぶすっとしているわけではない！　相変わらず年長者に対する礼儀がなっていないようだな」
「えへへ、なにかご用だった？」
　ダドリーの抗議は、さらりと流された。

　ぐぬぬっと歯がみするが、子どもの言うことだ。こらえておく。
「今日は、セルゲイさんに渡すものがあってな」
「かちょー？　おでかけしてるみたい。帰ってくるのは夕方かな」
「ふむ、本部だったか」
「うん」
　子どもの世話は大変なばかりだろうと考えていたが、まるで受付のようだった。実は意外と役に立っているのかもしれない。
「セルゲイさんは、ご不在か。仕方がない……渡す物は机にでも置いておくことにしよう」
「うん、わかった！　かちょーに言っておくね！　じゃあ、キーアはお料理があるから」
「ん？　待て。お前がひとりで料理をするというのか？」
「うん！　かちょーが帰ってくる前に作らないとね！」
　にこにこと笑顔でキーアが厨房に入る。
　中を覗きこむと、いくつもの食材が作りかけで置いてあった。
　そういえば、ロイドたちは料理中に支援要請を受けて出動したのだったか。
「んと、油物は後にしないと冷めちゃうから……先にスープかな」
　キーアが包丁を手にする。
　幼い彼女に、厨房の調理台は高すぎるようで、背筋を伸ばして身を乗り出すような格好で野菜を切りはじめた。
　ダドリーはあわてて止めに入る。
「ま、待て……子どもが刃物を使うなど危ない」
「ほえ？　へいきだよ」
「すこしは言うことを聞かんか！」
「……でも、今のうちにやらないと、パーティーに間に合わないし」
「パーティーだと？」
「うん！　かちょーのお誕生日パーティーだよ」
「あいつら、勤務時間に……‼」
「料理したらダメだったの？」
「あ、いや……待機中に料理を禁止するという規則はないが、常識的に考えてだな……」
　せいぜい、買ってきたケーキを食べるていどにするのが、普通ではないか？　まったく特務支援課は型破りだ。
　キーアが大きな棚の上段へと手を伸ばす。指先をぷるぷるさせるが、届かないようだ。
「う～～～……」
「どうした？」

「お塩が切れちゃってるの。前に買っておいたのが、棚の上にあるんだけど……」

「これか？」

当然ながら、ダドリーにとっては、なんでもない高さだった。紙袋を取ってやる。

「うん、これ！　ありがとー、ダドリー!!」

「まったく……子どものしつけ方について支援課(あいつら)にひと言、言っておかねばな……」

「じゃあ、料理しちゃうね」

キーアが小さい体にもかかわらず、テキパキと準備を進めていく。

「バニングスたちが帰ってきてからにしたらどうだ？」

「だって、いつ帰ってくるかわからないし……」

たしかに、いなくなった犬を探すなんて、いつになるか。

ダドリーはこめかみを押さえて、ため息をついた。

「仕方ない……私も手伝おう」

「え？　ほんと!?」

「子どもが、ひとりで料理をするなど、危なっかしくて見ておれんのでな」

スーツを脱いで、シャツの袖をまくる。ロイドのエプロンを借りることにして前にかけた。

きらきらとキーアが瞳を輝かせる。

「ダドリー、やっさしぃーー!!」



たいへん不本意ながら、ダドリーは料理を手伝うことにした。

手を洗って準備を終える。

「はじめは、なにを作ればいい？」

「なにが得意なの？」

「と、得意な料理か……」

正直なところ、それほど慣れてはいないのだが、子どもの手前、そんなことは言えない。

背筋を冷や汗がつたった。

「……どんなものでも任せるがいい」

ん～、と考えてから、キーアがレシピを指さした。

「じゃあ、この〝フレッシュサンド〟を作ってもらえる？」

「うむ、これなら♪　あ、いや……なんでもない。まかせておくがいい」

思わず明るい声が出てしまった。とりつくろうように、ことさら重々しく答え、ぐいっと胸を張る。

キーアが笑顔を浮かべた。

「ありがと～!!」

期待に応えるべく調理をする。

ゆで卵を作るために、まずお湯を沸かす。その間に、きゅうりを刻んだ。

温めた卵をナイフで細かくし、きゅうり、マヨネーズ、塩、こしょうと混ぜ合わせる。

焼きあげたトーストに乗せ、ハムとレタスもはさみこむ。

完成だ。

「よし、上出来♪　あっ……う、うぉほん！　ふん、これでいいのか？」

また弾んだ声をあげてしまった。

すこしだけ頬が熱くなる。

くいっ、とメガネを直した。

キーアが手をたたく。

「わぁ～、美味しそう♪」

「ふ、ふふ……まあ、当然だな」

子ども相手ではあるが、褒められて悪い気はしないダドリーだった。

「お前のほうは、どうだ？」

「んと、キーアはね、薬膳麻婆豆腐ができたとこ」

「なっ!?」

いつの間にか、キーアの手によって完成度の高い麻婆豆腐ができあがっていた。

濃い赤色と香辛料の匂いが食欲をそそる。

子どもの腕前とは思えない。

むしろ、素人のレベルではなかった。

「こ、これは……なんということだ……」

「えへへ、じゃあ、次はね――」

「どんなものでも任せてもらおう！」

「ほんと!?　じゃあ、〝匠風オムライス〟を作ってね！」

「ぬっ……」

「あ、無理そう？」

「むむ……い、いや、もちろん大丈夫だ！」

「えへへ」

ダドリーはレシピを見ながら頑張ってみたが、とき卵を薄く広げたり、崩さずに巻くのは本を読んだだけでは難しかった。

ぐしゃぐしゃになる。

「うっ、いかん……メガネが曇って……」

「え……ダドリー、だいじょうぶ？」

「これは……その……」

オムライスを目指した別の料理ができあがってしまった。

失敗料理というやつだ。

「ん～と、どうしよう？　食べてみたら、意外と美味しいかも？」



「パーティに出す料理ではないな……仕方ない。これは、私が食べるとしよう」
「え、でも……」
「いいか、たとえ失敗しても、食べ物を粗末にするのはダメだ」
「わかった。じゃあ、ツァイトにあげようよ！」
「む……食べるだろうか？」
　ダドリーは充分に冷ましてから、ずっと寝ている白狼のところへ失敗オムライスを持っていった。
　皿を持って現れたダドリーとキーアに、ツァイトが身体を起こす。
「グルル……」
「ツァイト～、ごはんだよ！」
「ガウッ」
「えへへ、『美味しそうな匂いがする』だってさ」
「まるで言葉がわかるみたいに言うのだな」
「わかるよ～」
「ふっ……そうか」
　ダドリーはうなずいた。
　子どもは夢があるものだな――と微笑ましい気持ちになる。
　身を起こしたツァイトの前に皿を置いた。
　ガフガフと食べはじめる。

「ツァイト、おいしい？」
　キーアがにこにこしながら聞くと、白狼がひと声、鳴いた。
「ウォンッ！」
「へー、そうなんだ～。『なかなか美味しい。この料理を作った者は才能がある』だってさ！」
「あ、ああ……」
　犬の食事を作る才能を褒められても、あまりうれしくなかった。
　そもそも、失敗した料理だし。
　ダドリーは、そっとため息をついた。
「よし、次こそ！」

　そして、数分後――
　キーアが気まずそうな顔をする。
「えっと……じゃあ、その〝フライドフィッシュ〟になれなかった料理は、コッペに」
「う、うむ……」
　屋上へ行き、黒猫に失敗した魚料理を与えた。
「にやゃゃあ～!!」
「これは……喜んでいるのか？」
「にゃ～お」
　食べ終えたコッペが、支援課ビルの裏へと消えた。

空になった皿と食べかすを片付けていると、すぐに猫が戻ってくる。

「にゃぁ～～～お」

ころり、とダドリーの前に、黒色の石を落とした。

「なんだ？」

ゴロゴロゴロゴロ……とコッペが喉を鳴らす。

石を手に取った。

「もしかして、私に？　こ、これは《時》系統のクオーツか⁉　しかし、形は同じだが、なにか違うような……」

ふと思い出す——配備予定の試作品として見せられた新型エニグマのことを。

戦闘時の行動力を支援するクオーツに、似たようなものがあったはず。

「まさか、新型のクオーツなのか⁉」

「にゃおーん」

「この猫……何者だ⁉」

「にゃぁおお～ん」

コッペは満足そうに鳴き声をあげると、よく日の当たる屋上で、ころりと丸くなった。

ぬぬぬ、とダドリーはうなる。

（売られてもいないクオーツを入手してくるとは……もしや支援課の活躍の陰には、この猫の働きが⁉）

「……ふっ……まさかな。偶然だ。このクオーツは遺失物として届けておくとして……一応、猫のことは一課の書類に追記しておくか」

後日、引き取り手の現れなかった《行動力1》のクオーツは、ダドリーの手に戻り、配備されたばかりのエニグマⅡに装着されるのだった。

キーアの指示に従って、あれこれパーティーの準備をしていると、玄関のほうから声がした。

「こんにちはー」

「む？　来客のようだな」

ダドリーたちが厨房から顔を出すと、玄関口には警備隊の制服に身を包んだ少女の姿があった。

キーアが笑顔で迎える。

「わあい、ノエルだ～」

「こんにちは、キーアちゃん！」

「ふむ……君は、ノエル・シーカー曹長だったかな？」

問いかけると彼女は目を丸くした。

「あれ？　もしかして、捜査一課のダドリー捜査官でいらっしゃいますか⁉」

「ああ、そのとおりだ」

「ご苦労様です！　……って、ここ支援課ですよね？　なにをされてるんでしょうか？」

「見てわからんのか？」

ダドリーはスーツを脱いで、エプロンを巻いている。

ノエルが首をかしげた。

「ちょっとわからないです……どうして、一課の捜査官が、支援課でキーアちゃんと料理を？」

「……そうだな。どうしてだろうな？」

ダドリーのほうが教えて欲しいくらいだ。

「ふふ、なかなか面白いことになっているみたいね」

ノエルの後ろから、クールで理知的な雰囲気の女性が姿を見せた。

やはり警備隊の制服を着ているが、左胸の階級章が将校であることを示している。

今度はダドリーが目を丸くする番だった。

「ソーニャ・ベルツ副司令⁉」

「お邪魔してもいいかしら。アレックス・ダドリー捜査官？」

「警備隊の実質的なトップが、警察のいち部署である支援課に……まさか、なにか事件が⁉」

「ふふ、そういうわけではないの」

「ロイドたちは支援要請で出動していますが……？」

「ええ、知ってるわ」

ソーニャの言葉に、ノエルが説明を添える。

「あたしたち、警備隊本部の近くでロイドさんたちに会って、誘われたんです」

「セルゲイの誕生日パーティーをするらしいわね。しかも、サプライズなんですって？　ふふ、楽しそうじゃない」

警備隊副司令ソーニャ・ベルツが、らしからぬ少女のような笑みを浮かべた。

おおっ、とノエルが驚いた顔をする。

そういえば……とダドリーは思い出した。

（……セルゲイさんと、ソーニャ副司令は……ならば、私がとやかく言うことではないな）

ひとつ、うなずく。

「わかりました。パーティー料理の準備中なので、お茶くらいしか出せませんが、中で待っていてください」

「ふふ、おかまいなく」

「あたしにも手伝わせてください！　美味しそうな匂いがしてますね。もうケーキは買ってあるんですか？」

「えへへっ、ケーキも作るんだよ」

「えっ、手作りなの⁉」

「うん！」

元気よく答えたキーアに、ダドリーは驚愕の声をあげる。
「おい待て、今からケーキ……だと⁉」
「そのほうが楽しそうだもん」
「しかし……」
「あら、大変そうね。私も手伝おうかしら？」
ソーニャがうれしそうに袖をまくる。
今度はノエルが声をあげた。
「えぇっ⁉　副司令が⁉」
「あら……私だって、料理くらいできるわよ。まあ、ここ数年、ごぶさただけど」
そこに、さらに来客があった。
「あの……すみません……」
「む？」
もじもじと気後れした様子で、黒髪の美しい少女が姿を見せた。
ダドリーは我が目を疑う。
「なっ⁉　もしかして……リーシャ・マオ嬢か⁉」
劇団アルカンシェルの看板スターのひとりである。
リーシャが困ったような顔を浮かべた。
「やっぱり、ご迷惑なんじゃ……」
彼女の背を押すようにして、栗色の髪の少女が入ってくる。
ウルスラ病院の看護師セシルだった。

「ふふ、ロイドが大丈夫って言ってたから平気よ」
華やかなふたりが来たら、部屋の空気まで変わったように感じられる。
リーシャが、ぺこりと頭をさげた。
「すみません……セシルさんから、ここでお祝いのパーティーをやるからとお誘いを受けまして……」
「うふふ、すこし前に、リーシャさんに助けてもらったことがありましたから」
はたはたとリーシャが左右に手を振る。
「いえ、そんな！　たまたまロイドさんたちと一緒にいただけです」
「だとしても、助けてもらいましたから。いつか、お礼をしたいとロイドと話してたところだったんです」
「あれは、むしろ私のほうが、ロイドさんにお礼を言いたいくらいで……」
この調子だと、延々と同じことを繰り返しそうだ。
ダドリーは割って入る。
「だいたい話はわかりました……つまり、リーシャ・マオ嬢も、セルゲイさんの誕生日パーティーに来たんですね？」
「はい。支援課のみなさんには、お世話になってますから、お祝いができたらいいな、と思いまして」
「なるほど……」

プライベートでの参加であれば、ダドリーの立場から、どうこう言うべきではないだろう。
セシルが確かめるように尋ねてくる。
「ロイドが誘っても大丈夫って言ってたし、きっとセルゲイさんも喜んでくれますよね？」
「まぁ、経緯はともかく……リーシャ・マオ嬢に来てもらったら、普通はよろこぶでしょう」
セシルとリーシャが安堵したように表情をやわらげる。
ノエルが元気よく腕まくりした。
「よし！　人数も増えてきたことですし、じゃんじゃん料理しちゃいましょう！」
セシルとリーシャも手伝いを申し出てくる。
「お料理の最中でしたか？　よかったら、手伝わせてください」
「私もなにか……炒飯とか坦々麺とか、東方系の家庭料理なら得意です」
キーアが瞳を輝かせた。
「わあい！　みんなでがんばろ～‼」
小さな手をにぎりしめて、号令をかけた。
「おー‼」
ノエルとセシルが、ノリ良く合わせる。
リーシャとソーニャは微笑んでいた。

騒々しくなったせいかツァイトが起きて、階段をのぼっていく。
ダドリーは皿を並べたり、食材が足りないと言われて買い出しに行ったり、息つく暇もないほど働いた。



夕方――
「ただいま～」
ロイドが帰ってきた。エリィとティオとランディも一緒だ。
そして、それぞれが驚きの声をあげた。
「パーティーの準備が終わってる⁉」
「いい匂いがするわね」
「……すごい料理がならんでます」
「おいおい、まるでパーティー会場みたいじゃねえか⁉」
料理をテーブルにならべていたダドリーは、咳払いをした。
「みたいではなく、ここはパーティーの会場だ。企画したのは、お前たちだろうが」
キーアが厨房から飛び出してきた。
「ロイドー‼」
「ただいま、キー……おいおい、手が……⁉」
幼い女の子の手は、なにやら白いものまみれになっていた。

しかし、ロイドに向かって突進する勢いは止まらない。

べちゃり！

「うっ……キーア……」

「あれ？」

ロイドの服に、べっとり白いものがついていた。

キーアのほうも鼻や口元に、べたべた白いものをつけている。

ぺろり、と舐め取った。

「えへへ～、甘～い♪」

「……キーア、これ生クリームか？」

「うん！」

服をクリームでべたべたにされたロイドだったが、優しくキーアの頭をなでる。

「今日は、みんなでパーティーの用意をする予定だったのに……ごめんな。こんなに遅くなっちゃって」

「ううん！　お仕事だからいいの。へいきだよ！」

けなげな様子に、ティオが涙ぐんで、キーアのことを抱きしめる。

「……キーア！」

「んあ？　ティオにもクリームついちゃうよ？」

「いいんです。そんなの気にしません」

「キーアちゃん、お料理とか大変だったでしょう？」

エリィの言葉に、キーアが首を横に振る。

「みんなが手伝ってくれたから！」

厨房から、ノエル、ソーニャ、リーシャ、セシルが顔を出した。

それぞれが、ロイドたちに、ねぎらいの言葉をかける。

ランディがテンションを跳ね上げた。

「うおっ⁉　リーシャちゃんに、セシルさん⁉　本物か⁉　それとも夢か幻か⁉」

ロイドたちは驚いたり、お礼を言ったりと、大変だった。

ようやく落ち着いた頃――

玄関から、ひとりの青年が入ってきた。

「やれやれ……大騒ぎだね。僕も仲間に入れてもらっていいのかな？」

「あっ、外で待ってたのか？　もちろん歓迎するよ」

ロイドが迎え入れたのは、中性的な美貌と、皮肉めいた笑みが印象的な青年だった。

ダドリーは一瞬、言葉を失ってしまう。どうにも驚くことの多い一日だ。

「………ぬおっ⁉　貴様はワジ・ヘミスフィア⁉」

「やあ、お久しぶり。ダドリー捜査官」

ワジは不良グループ《テスタメンツ》のリーダーである。

「支援課は、一応、警察の組織だ。どうして、お前がここにいる？」

ティオが小さな声で「……一応は余分では？」とつっこんだ。

それはともかく、ワジが応じる。

「どうしてって、彼に誘われたからさ」

「む……どういうことだ、バニングス⁉」

ダドリーが睨むと、ロイドは当然という顔をしていた。

「支援要請を受けて探してた飼い犬なんですけど、旧市街のほうへ逃げてしまって……隠れるところが多いから、これは大変だと思ってたら、ワジが協力してくれたんです」

ワジが話を引き取る。

「旧市街は野犬同士も縄張りを持ってるからね。迷いこんだ犬の逃げこむ先は、それほど多くないのさ……その犬を説得したのは、ティオだけどね」

「……話せば、わかってくれました」

納得できるような、できないような話だ。

「協力してもらったのは、確かなのだろう……しかし、不良グループのリーダーを招くなど――」

「あの、ダドリー捜査官。誰であろうと、この場に来てくれた人を追い返すというのは、お祝いに水を差してしまうことになりませんか。それに彼なら、おかしなことはしないと思います」

そう言ってかばったのは、意外にもノエル曹長だった。

（……もしかして、知り合いなのか？）

ダドリーは納得しかねるが、そもそも、パーティーの主催者はロイドだ。

そして、なにも言わないということはソーニャ副司令までワジの同席に異論ないのだろう。

ため息をついた。

「まぁ、パーティーとは、こういうものか……」

ワジが肩をすくめる。

「ふふ……なかなか異色の取り合わせだね。捜査一課のエリートと、警備隊の人たちと、アルカンシェルのスターかい？　そのうえ、不良グループのリーダーまで呼ばれて、警察官のお誕生日会だなんて……こんな妙なパーティー、いくら僕でも経験ないよ」

楽しそうに笑っていた。

まったくもって非常識だ、とダドリーは思う。

ロイドはクリームまみれの服を着替えに自室へあがり、エリィとティオはキーアの顔をぬぐってあげる。

子どもとは思えないほどしっかり者に見えたキーアだが、世話されている姿は、まだまだお子様だ。

そして、予定通りの時刻に、本日の主役が姿を見せる。
特務支援課の課長、セルゲイが帰ってきた。

会議スペースの大きな長机には、いっぱい料理がならんでいる。
ホワイトボードには『HAPPY BIRTHDAY』の文字。
そして、笑顔で出迎えた面々は――支援課のロイド、エリィ、ティオ、ランディ、キーアと、警備隊のノエル曹長、ソーニャ副司令。劇団アルカンシェルのリーシャ・マオ。ウルスラ病院の看護師のセシル。さらに、テスタメンツのワジだ。
もちろん、捜査一課のダドリーもいる。
いつの間にか、ツァイトも戻ってきていた。
タバコをくわえたまま、セルゲイが唖然として、つぶやく。
「……なんだ、こりゃあ……？」
「かちょー、お誕生日おめでとー!!」
キーアが最初に、お祝いの言葉を投げかけた。
みんなも口々にお祝いする。
セルゲイが目を白黒させていた。
ソーニャが、グラスを手渡す。
「乾杯くらいしたら？」
「あ、ああ……」
みんなが言葉を待っていた。セルゲイが困ったような笑みを浮かべる。
「クク……数日前から、なにかやってるとは思ってたが……やれやれ、この忙しいのに、元気なやつらだな」
ロイドたちが照れ笑いで返した。
セルゲイがグラスを掲げる。
「誕生日を祝うような歳でもねえが……ま、礼は言っておこう」
みんなで乾杯した。
ロイドたちはノンアルコールにしておく。ランディなどは残念そうだったが。
たくさんならべられている料理に、セルゲイが感嘆をあげた。
「ほう、こいつはすごいな……誰が作ったんだ？」
キーアが説明する。
「んとね、その匠風オムライスはノエル！　こっちの龍老炒飯がリーシャで、あっちの煮出し魚鍋はソーニャだよ！」
「……煮出し魚鍋か」
セルゲイは唇の端をゆるめ、小皿に分けて、煮出し魚を口にした。
「……懐かしい味だな」



「ふふ、本当に覚えてるのかしら？」
　ソーニャが苦笑していた。
　ワジがテーブルの端に、酒瓶とグラスをならべる。
「人が多いし、僕はバーテンの真似事でもしようかな」
「ちょっと、ワジ君、ここ警察署だよ⁉」
「わきまえてるよ、ノエル。ノンアルコール・カクテルも作れるさ。これなんかオススメだよ」
　手際よく作られたのは〝ベルベリージュース〟だった。
　アルコールは使われていない様子だから、と飲んでみて、ノエルは目を丸くする。
「す、すごい！　美味しい……とっても甘いのに、すっきりしてて」
「ふふ……そうだろ？」
　キーアが、ロイドに声をかける。
「ねえ、そろそろ、ケーキを出そうよ！」
「えっ⁉　ケーキまで、ちゃんと作れたのか⁉」
「えへへっ！　セシルが手伝ってくれたもん。キーアもがんばってかわいくしたんだよ」
「そいつは楽しみだな。よし、丁寧に運んでこよう」
「俺も手伝うぜ」
　ロイドとランディで厨房からテーブル中央へ誕生日ケーキを運んだ。
　キーアが書いたというメッセージ入りの手作りケーキを前にして、セルゲイが目頭を押さえる。
「クク……まったく、おまえたちは……」
「すごいです。プロ顔負けですよね」
　リーシャが褒めると、セシルが頬を赤くした。
「前に失敗してから、何度か作ってみたから……少なくとも、味のほうは普通だと思うわ」
「普通じゃない味のケーキを作っちゃったんですか……？」
「甘くないケーキになっちゃったことがあるの」
　セシルが小さく舌を出す。
「そういや、そんなこともあったな」
　昔のことを思い出したらしく、セルゲイが苦笑していた。
　玄関がノックされる。
　ダドリーは振り向いた。
「むっ……バニングス、まだ来客があるのか？」
「え？　いえ、俺の知ってるかぎり、これで全員だと思いますけど」
「では、誰だ？」
　ダドリーが玄関扉を開けると、マイクを持ったグレイス記者と、カメラを構えたレインズが入ってきた。
「こんばんはー‼　クロスベル通信（タイムズ）です！」
「帰れ」

「うわっ⁉　ダドリー捜査官……どうして支援課に⁉　まさか、出向ですか？」
「わ、私が支援課に出向するものか！　今は記者など入れるわけにはいかんのだ」
「ええー⁉」
「まったく、どこから嗅ぎつけてきた？」
「ふっふっふっ……記者としての直感が、なにかあると……こう、ピュキーンと」
「とにかく帰れ」
「うあ～、わかりました！　じゃあ、記事にしませんから！　その交換条件でどうですか⁉」
「つまり……追い返したら記事にするわけか……その約束、守ってもらうぞ？」
「もっちろん！」
　ずいずいと奥に入ってくる。
「うふふん♪　あ、セルゲイ課長、お誕生日、おめでとうございます！　つまらないものですけど、これ」
「お、おう……そっちは、最近、大活躍じゃねえか？」
「いや～、新市長体制になって、あれこれ大激変ですから書くことが多くて多くて」
「だろうな。それなのに、こんな小さなことに時間を使っていいのか？」
「ん～、なにがあっても、支援課からは目を離さないほうがいい気がするんですよね……ま、私の記者としての勘ですけど」
「ククク……期待に添えるといいがな」
「うふふふっ……」
　記者魂の宿った瞳が、めらめらと燃えていた。
　盛りあがっているグレイス記者にカメラマンのレインズが耳打ちする。
「あの～、グレイス先輩……」
「なに、レインズ君？」
「これ記事にしないって約束なら、写真は撮らないほうがいいですよね？」
「うーん、たしかに、ここで撮影すんのは、ちょっとね……でも、せっかく来たのになにもしないんじゃ、甲斐がないでしょ？」
「いや、僕はべつに……」
「そうだ！　集合写真を撮りましょうよ！　プリントしたら感光クオーツごとセルゲイ課長に渡すわ。それでどう⁉」
「ククク……まぁ、俺が決めることじゃねえな」
「どう⁉」
　今度はダドリーが尋ねられた。
　セルゲイが預かるのなら、文句はないが――

「やはり、ここはお前が決めるべきだろう、バニングス」
「俺ですか⁉」
　すこし考えてから、ロイドがうなずく。
「……うん……撮られたくない事情のある人は映らなければいいんだし、撮ってもらおう。こんなふうに集まれるのは、とても貴重なことだと思うから」
　エリィとティオも同じ気持ちのようだ。
「大切な思い出だもの、残せたらうれしいわ」
「……キーアが、がんばってくれたことも記録されますね」
「えへへっ！　写真とるの⁉　やったぁ！」
　キーアが両手を挙げた。
　他の参加者たちもかまわないとのことで、みんなしてケーキの前にならんだ。
　レインズが、どこから持ってきたか脚立にのぼり、角度をつける。
「グレイス先輩、ライト板、もうちょい高くお願いします」
「ぐぐぐ……もう、これ以上は背が伸びないっての！」
「がんばってください。あきらめないのが記者魂だって、いつもグレイス先輩が言ってるじゃありませんか」
「うぐ～」
　撮影になった途端、上下の立場が逆転して、すっかりアシスタント扱いのグレイスだった。

　レインズがカメラを構える。
「いいですか、撮りますよ～、3、2、1、はい。ありがとうございました！」
　撮影が終わり、ほわっとした空気になる。
　そのとき、ロイドのエニグマに着信があった。



　懐から取り出して、カバーを開く。
「やあ、フラン……え？　なんだって⁉　そんなことになったら……くっ‼」
　ロイドの様子から、大変な事態が起きたことは、すぐ推測できた。
「ああ……わかった……すぐ現場に向かう！」
　ロイドが通話を終える。
　ダドリーはスーツの上着を羽織り、装備（インペリアル）を確認した。
「バニングス、今度こそ事件のようだな⁉」
「はい！　ジオフロントの扉が故障して開いたままになり、住宅街に多数の魔獣が現れているそうです！」
「なんだと⁉　捜査一課としても放っておけない事態だ。よし、特務支援課、合同強制捜査だ！　私についてこい！」
「了解‼」

「市民の避難もしないと」
　エリィの言葉に、ティオがうなずく。
「……逃げ遅れた人の探索（サーチ）は任せてください」
「よっしゃ！　とっとと片付けようぜ‼」
　ランディがスタンハルバードを肩にかついだ。
　ノエル曹長が進み出る。
「あたしも協力します！　装備は最低限しかありませんが、市民の誘導ならできますから！」
「そうね……警備隊の軽装甲車なら、ジオフロントの魔獣にも対抗できると思うわ」
　ソーニャ副司令が直々に承諾してくれた。
　ダドリーはうなずく。
「願ってもない！　協力、感謝する！」
　こんなときだというのに、ワジが動じることなくカクテルを作っていた。
「やれやれ……相変わらず落ち着かないね。まぁ、僕は帰りを待つことにするよ。まさか、これでお開きじゃないだろ？」
　ロイドが笑みをこぼす。
「もちろん、できるだけ早く退治してくるよ……支援課ビルには、課長もツァイトもいるから大丈夫だと思うけど、セシル姉やリーシャたちを頼む」
「ｊａ（ヤー）・他ならぬ君の頼みだ、引き受けよう」

　セシルとリーシャが、心配そうに見つめていた。
「気をつけてね、ロイド。ケガしないで帰ってきて」
「ロイドさん、お気をつけて……」
「ありがとう！」
　それから、ロイドはキーアの頭をなでた。
「ごめんな……ちょっと行ってくる」
「うん。がんばってね、ロイド！」
　出動に際しても、セルゲイは黙って見ているだけだった。
なにも命令しない。
　ただ、視線を交わして、互いにうなずく。
　信頼しているのだとわかる。
　これが支援課の流儀なのか――とダドリーは思った。
　ロイドたちは自分で考え、自分が信じる道を全力で進んでいく。
　ダドリーのやり方とは違う。
　しかし、彼らを認める気持ちは以前よりも強くなっていた。
　ロイドが扉を開ける。
「さあ行こう！　みんな！」
　仲間たちと表に出るロイドの後ろ姿に――ダドリーは、彼の兄ガイ・バニングスを重ねる。
「ふっ……いや、まだまだ遠いな。しっかりと私が指導してやらねば」

夜のとばりに包まれた街を守るため。
事件の現場へと走りだすのだった。

第５話『ダドリーとバースデーパーティー』了




だって教授がヨシュアが帰ってこないのはエステルのせいだって言ったから
え…
レ
レンちゃんっ…
でも今回だけは許してあげるわ
うふふ特別なんだから
それでは皆様
今宵はお茶会に参加して頂き
まことにありがとうございました
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
第十二話
脚本 田沢大典
作画 楽時たらひ


はい
そうですか…
ええ
わかりました
よろしく
お願いします
どうだった？
エルナンさん
ええ
カノーネ元大尉が
事情聴取に
応じたようです
詳しい事情が
わかったら
ギルドにも教えて
くれるでしょう…
…そっか…


…あの…
エステルさん
本当に
レンちゃんは
《結社》の…
……
うん…
《執行者》の一人で
《殲滅天使》って
名乗ってた…
本人が
言ってたから
間違いないわ
そうですか…
で でも
あんな女の子が
《結社》の
手先だなんて…
しかも《執行者》って
かなりの使い手
なんだよね？
……
何かの
間違いなんじゃ
ないかな？
…ううん
本当だと思う


ヨシュアも同じくらいの歳で《執行者》だったみたいだから…
……
あ……
……ヨシュア
レン…
結社……!!


イノシシみたいな飛行艇はぜんぶふりきれたわね
ありがとう《パテル=マテル》


よく帰ったな
レン
！
レーヴェ！
ただいま
言われたとおりちゃんと実験してきたわ
ああ ご苦労だった
しかし随分と派手にやったものだな
おかげでとっても楽しいお茶会がひらけたわ
ふふ…そうか
だって今回は人を殺しちゃダメって言われてたんですもの
つまらないからせめて賑やかにさせてもらったの
実験の結果はどうだった？
そうね
悪くないんじゃないかしら
教会のお兄さんの裏ワザに邪魔されちゃったけど…
動作も安定していたし充分実戦でも使えると思うわ
成る程
でも《ゴスペル》って量産できないんでしょう？
兵器として使用するのはちょっと微妙じゃないかしら
量産する必要はないからな
今回の実験にしてもあくまで新型の《ゴスペル》の潜在能力を測るのが目的だ
別に兵器を造ることが目的というわけじゃない
ふうん…
ところで彼らの実験はどうなってるのかしら？
ああ
概ね…良好といったところらしい
ザザ…
9割方 成功といっていいだろう


起動装置が生み出した映像をかなり遠くの座標まで転送できた
ただ最初も1、2回は転送に失敗したらしくてな…
3回目を越えたあたりから完璧に作動するようになった
ふむ…
不安要素はあるが悪くない
早速 教授に伝えておこう
…しかし
《ゴスペル》か…
導力停止現象もそうだが今の技術を遥かに越えているな
一体どういうカラクリなのかね？
俺も詳しくは聞かされていない
ただ教授によればそれらの現象は「奇跡」の一端にすぎないらしい
……
…
奇跡ときたか
本来 奇跡とは女神にしか許されぬ御業…
その言葉をあえて使うとは…
教授の考えていることとは摩訶不思議だ
クカカ…
ジンの野郎め
随分とフヌけてやがった
あんだけヤキ入れとけば次までに相当功夫を練ってくるだろうよ


楽しみだ
次こそ
ブチ殺してやるぜ!
…ヴァルター
実験の
成果は
あぁ?
あー
てめぇの
把握してる通りだよ
問題は
特にない
…わかった
フフ
楽しそうね
ヴァルター
知人との再会が
そんなに嬉しかったの
かしら?
私もどうやら
昔の因縁が
ついてまわりそう…
ほう
男か?
人に聞く前に
あなたの古傷を
晒してくれるかしら
遊撃士協会に
いるという
かつての想い人をね
チッ…
…因縁というものは
難しいわね　レオンハルト
結びたくとも
離れ
解したくとも
もつれ
そして
断ち切りたくとも
絡み合う…


蜘蛛の糸にように どこからともなく現れ
そして消え 紛れていく
私達はただ 実験のために 集められ
そして自らの意志で 実行するに過ぎない
…けれど本当は 自ら選んだつもりな だけで
因縁に引きよせられて いるのかもしれない
……
レオンハルト
恐らくは… 貴方もね
もう 聞いてるの?
レーヴェ?
…いや すまない
ヨシュアはまだ 見つからないの?


ああ…撹乱用に放たれた人形がすでに何体もやられたそうだ
おそらくあいつのしわざだろう
ふぅん…つまんないの
そういえば教授がエステルのせいでヨシュアが帰ってこないって言ってたけど
エステルもヨシュアのことを探してるみたいなのよね
どういうことなのかしら?
……
…レン
あまり教授の言うことを鵜呑みにしない方がいい
どうして?
真実というのは見方によって変わるものだ
たとえば月の顔が様々な形に例えられるように
ウサギさんとかカニさん?
ああ


教授が語る真実とレンにとっての真実は別物だ
実際に見て感じたことからレンなりの真実を掴むといい
う〜ん…
…難しくてよくわからないけど…
レン
エステルたちのこと割と気に入っちゃったかも
今度会ったとしてもいきなり殺したりはしないわ
それでいい
ご苦労だった


教授… それに カンパネルラ！
あなたも 来ていたのね？
ふふ 先日ね
君のほうは王都で かなりお楽しみだった みたいじゃない
まぁね
あなたが来るって わかってたら 絶対に招待して あげたのに
とっても 盛り上がったのよ？
レン

レン 随分とエステル君のことを 気に入ったみたい じゃないか
うふふ まぁね
教授の 言っているような イヤなお姉さんじゃ なかったわ
はは…私は別に イヤな人間とは 言ってないさ
むしろとても 好感のもてる 魅力的なお嬢さん だと思うよ
ただヨシュアが 戻ってこないのは 彼女が原因で あるのも確かでね
そうだろう？ レーヴェ
…因であるのは 否定しない
だが…
ああ… そうだ
どうだろう レン


エステル君が仲間になったら君は喜んでくれるかな?
な…!
エステルを仲間に?
そうだ
…いいわ
とっても楽しそう!


かなり実力不足だけど鍛えればモノになると思うし…
それにエステルがいたらヨシュアも戻ってくるわよね?
!
フフ もちろんさ
あっはは さすが教授
ホントいい趣味してるよね
…戯れが過ぎるなワイスマン
いくら貴様といえど本人の意志を無視して結社に入れることなどできないハズだ
それが《盟主》の定めた《身喰らう蛇》の掟だろう


言われるまでもない
《蛇の使徒》たるこの私がそんなことをするとでも思うかね？
君やヨシュアにだって決して強制はしなかっただろう？
……
…選択肢を奪うつもりか
俺達のように…！
第一 そんなことをしてはせっかくの楽しみが台無しだ


あくまで自発的に仲間になってもらわなければ
こうして卑劣な手段を使うのだな…
やはり この男は
因縁というものは



2011年10月からから好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第34回-第35回　生天目仁美（『零の軌跡 Evolution』グレイス・リン役）

34回、35回のゲストは、グレイス・リン役の生天目仁美さん。今まではドラマCDでしかグレイスの声を聴くことができなかったので、今回初めて彼女の声を聴いたという人も多いはず。トークパートも劇中の彼女同様に、終始ハイテンションのまま進んでいった。また、「出発！特務しれん課」のコーナーでは、久しぶりに恐怖の試食コーナーが復活。戦々恐々とするパーソナリティふたりだったが、結果はしおりんの方がおいしいという、意外なものに……。

▶第34回-第35回の舞台裏◀

フリートーク内で行われた「まぁでもjdkなんで・・・(仮)SC ～ (祝)まぁでも～ヲタん生日なんで・・・」のレポートで行われたライブ曲リクエストは、当時いきなり突撃したにも関わらず、想像以上の熱いメッセージが寄せられた。ファンの声がライブに反映される日も近い!?

第36回-第37回　田中理恵（『零の軌跡 Evolution』マリアベル・クロイス役）

36回、37回のゲストは、マリアベル役の田中理恵さん。田中さんはこのラジオ収録の少し前に、ロイドとエリィが物語の中心を担うドラマCD『零の軌跡～金の太陽、銀の月～』の収録を終えたばかりということで、田中さんの登場セリフやつぶやきは、今までに上にエリィへの愛に溢れた（？）ものだった。そして、ことあるごとに美女大好きっぷりをアピールしていたコテさんのテンションは、田中さんの登場により最高潮に！

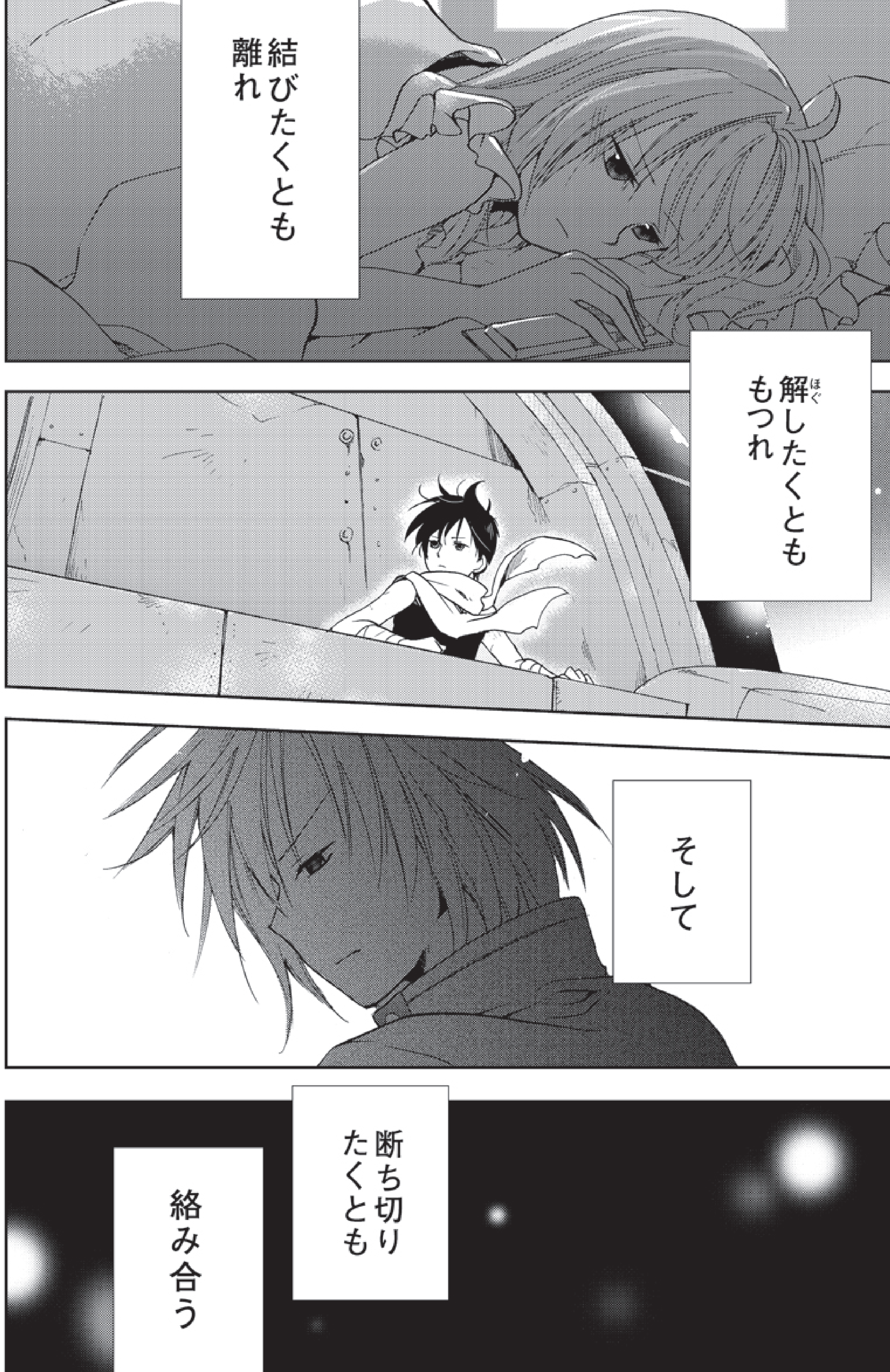
▶第36回-第37回の舞台裏◀

「出発！特務しれん課」ではしおりんとガチ君のイラスト対決が行われ、ガチ君の画伯っぷりに一同大爆笑。しおりんは美術部だったというだけあり、見本がないにも関わらず見事なイラストを完成させた。ちなみに、しおりんのサインはこの日に初めて作られた渾身の一筆！



今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！



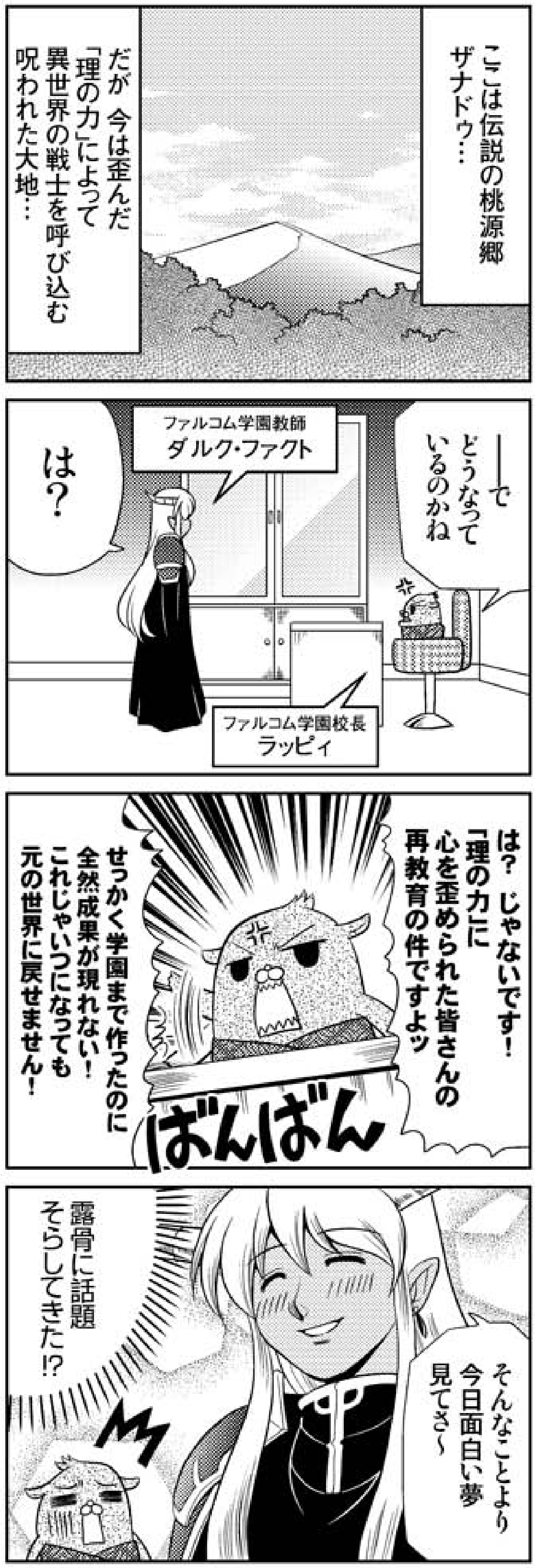


みんな集まれ！ファルコム学園

『みんな集まれ！ファルコム学園①』
7月19日発売なんです！
マジで！

新久保だいすけ

呼び出し



よっぱらい



クビ



新たなる教師



歓迎会



視線



教育方針



できない子達



くいだおれ



そそるセリフ



博士号



外法



自覚してるだけマシか…？

ウワサのアイツ



方術



ダイスキ



英雄伝説 空の軌跡
～リベール王国スナップショット～

著：はせがわみやび

第3回『うたかたの夢を見ないで』（前編）

1.

船の甲板の縁ぎりぎりにひとりの女性が立っている。

強い風にブラウンの髪が躍っていた。黄色のリボンは今にも千切れてしまいそう。

背中から押しつけてくる風に髪が乱れて口許を隠した。

「うっ……ぷ！　ぺぺぺ！　あうう。口の中に髪が入っ、んぺぺっ。自分の髪なんて、食べても美味しくないですよぅ。いえ、決して他人の髪なら美味しいというわけではないのですがっ！」

と、彼女はひとりでボケてひとりでツッコむ。おっとりした性格をそのまま現したかのような、鼻の上にちょこんと乗った丸眼鏡がトレードマーク。リベール通信社のまだまだ新米カメラマン、ドロシー・ハイアットだった。

ドロシーは吹きつける風に身体を揺らしながら、船縁に掴まって、ぐっと身体を乗り出した。

眼下を覗き込む。

見えるのは海――ではない。

遥か下には茶色の大地を割って流れる青い川。

ドロシーが立っているのは空を飛ぶ船の甲板だった。

定期便が再開し、リベール王国の上空には飛行船が飛ぶようになっている。

目をこらす。

船の影が落ちる大地から視線を動かし、下流に向かって徐々に広がってゆく川の流れを追う。

「あっ！」

見えた。

海に向かって扇のように広がってゆく河口と、その中州の上に作られた白い街並み。

「あれが……ルーアンですか！」

そう叫んだときにはもうドロシーはカメラを構えてシャッターを切っていた。

吹きつける風にドロシーの髪がふたたび躍る。躍る。

だが、くしゃくしゃになってしまった髪を気にすることもなく、彼女はファインダーから目を離さない。

「きれいな子ですよぅ。コントラストが素敵ですー」

口許からは言葉が絶えない。

子、と言っているが、その言葉が指しているのは青い海に浮かぶかのように造られた白い街のことだ。

海港都市ルーアン。

別名、水の上の都。

立て続けに鳴る機械音が、ファインダー越しの光景を感光クオーツへと次々に焼きつけていった。

「街並みの白は、あれは煉瓦ですね！　海の青との対比が素晴らしいですねっ。そりゃもう美人さんです！　グッドです！　ビューティホーです！」

夢中になっているドロシーに背後から近づく影があった。

「お嬢さん、そろそろ船内にお戻りください。着陸に入りますから」

「ふぁ？」

声を掛けられてようやく集中が切れたドロシーがそれでもまだ夢見るような表情で振り返った。

「あの……。ご職業に熱心なところ恐れ入りますが。到着の瞬間は揺れますし、船内にいたほうが安全ですので」

振り返ったドロシーの前に、空飛ぶ船の船員が白い帽子を取って笑いかけてきた。

「あ……。ああ！　りょ、了解です！　ばっちりわかりました、はい」

そういえば到着を知らせるアナウンスが聞こえたような。

――こんなことがナイアル先輩に知られたら、また呆れられてしまいますねー。

ドロシーは名残り惜しそうに振り返りつつ、船員の案内に従って船の中に戻った。

それから半刻後。

船はルーアンへと到着し、ドロシー・ハイアットは本社からの手紙を携え、同僚であるナイアルの滞在するホテルを目指していた。

2.

空港から出て西へ、ドロシーはまっすぐに白い石畳の通りを歩く。

海から吹く風に混じった潮の香りが鼻をくすぐっている

初めて訪れる街。目に映る景色は全てが新鮮。残らずカメラに収めたいところだ。

——でも今はお仕事が先です。

ナイアル先輩は、この通りを行った先の《ブランシュ》という名のホテルに泊まっているらしい。急げ急げ。

——っとと、いけない。

前の街では、こうやって急ぎすぎてドロシーはあやうくコケそうになったのだ。

早々何度も同じ失敗はしでかさない。たとえこの白亜の街並みが王国一の優美さを誇っているんじゃないかって思えて、目を奪われてしまお——おや、あれは何でしょう?

左手に大きな糸巻が見えた。

「ぶっとい鉄の糸を巻きつけてありますね……はて?」

一般的にはそれは『鎖』と呼ぶ。家一軒ほどもある円筒に、大人の腕ほどもありそうな鉄の鎖がぐるぐると巻きつけてあるのだ。そんな大きな筒が三階ほどの高さのところに横倒しになって見えている。

近づいてみれば、馬車がすれ違えそうなほどの大きな橋のつけ根だった。左右に太い石の塔が立っていて、その塔に両端を支えられる形で倒した円筒が据えつけられている。ぱっと見、まるで橋の袂に作られた門のようだ。

ああ、とドロシーはようやくその仕掛けの正体に思い至った。

——ひょっとしてこれは吊り橋の巻き上げ機なのでは?

その証拠に、橋の中央あたりには切れ目が見えるし、川を渡った向こう側にも同じような横倒しの円筒が見えている。

「ふあ〜〜〜〜。すっごい大きさですよぅ!」

ドロシーは橋の大きさに素直に感動してしまった。

橋は幅広なだけでなく、歩けば百アージュ、つまり二百歩ほどもありそうな長さも持っている。

しかも、これは『跳ね橋』だ。大きな筒を回して鉄の鎖を絡め取り、橋を中央で割って手前と向こうに引き上げるのだ。この大きな橋の半分を持ち上げることができるなんて、巻き上げ装置はきっと《導力機関》を使っているに違いない。

これはすごい! 必見ものの大仕掛けだ!

——よし、先輩には待っていてもらいましょう。

胸元に提げた紐を手繰り、オーバルカメラを手にしようとしたときだ。

背後からどん、と押されてドロシーはたたらを踏んだ。

「あ、あ、あ!」

手の中でお手玉するカメラを落とすまいと必死になる。そこにさらに、どん、どんと二度押されて、ドロシーは堪らず膝をついた。石畳に打ちつけて思わず悲鳴があがる。

じん、と膝頭に痛みが走った。涙目になる。なんとかカメラは落とさなかった。

「痛いですよぉ!」

誰かにぶつかられたのだ。それはわかっていた。顔を上げて、自分を追い越した輩を見る。

五歩ほど先で男が三人、振り返っていた。

どうやら橋を渡って南のほうへと行こうとしていたようだ。

「んだよ?」

「ああん!」

「誰だおまえ?」

振り返った顔は思ったよりも若かった。まだ大人とは言えない、というあたりの年頃の三人だ。それでもドロシーよりは年上だろうか。

「誰って……いいましてもですねー。通りすがりのカメラマンですけどぉ」

「はあ?」

「なんだ、観光客かよ」

「見物がしたいんだったら、俺たちが案内してやろうか?」

灰色の髪の男がそう言い、深い緑にも見える髪の男がすかさず突っ込んだ。

「ロッコ。おまえ、この前もその台詞言ったよな」

「言うんじゃねえよ、ディン! 思い出したくねえんだ!」

柄の悪いことこの上ない口調でそんなことを言う。

——これは……不良さんってやつですねー。

「それにこんな眼鏡のちんちくりんをナンパしてもしょーがねー! さっさといつもの場所に行くぜ!」

さすがのドロシーもむっとくるところ。だが、それよりも大事な事実が発覚した。

「って、あれあれ?」

気づいて焦る。

「ポーチがない!? どど、どこへ落としたのでしょう!」

ベルトに留め金で引っ掛けていたポーチがない。中に社で預かった封筒が入っているというのに。転んだときに落としたのだろうか。

三人組のことなど頭から飛んでしまって、あわてて屈んで探そうとした。

「これか?」

ひょいと自分の顔の前に見覚えのあるポーチが差し出される。

「あ、これこれ。これですよー」

ありがとうございます、と顔をあげたら、そこにいたはずの人物は、もう駆け出していた。背中が先ほどの三人に向かってゆく。

「遅ぇぞ、カイヤ！」

「は、はい！　今行きますっ、センパイ！」

三人組よりもやや若い。カイヤと呼ばれた彼はまだ少年の面影を残していた。潮風にやかれた黒い髪と、袖のない服を着て、肩まで日焼けした男の子だった。

なんだか、三人組に比べると違和感がある。

センパイ……？

――不良さんの先輩・後輩ってことでしょうか？

大きな橋を渡って南へと駆けていく四人を見つめていたドロシーだったが、はっと気づいて、首から紐で提げていたカメラを構えた。

パチリ、と。

四人の背中を咄嗟に映しておいたのは職業意識のなせる業だったけれど、それが後々役立つことになろうとは。

ドロシー自身もこのときには思ってもいないことだった。

夕暮れを告げる鐘が鳴る。ドロシーはホテルを目指して歩きだした。

3.

「んぁ？　なんてった？」

ナイアルが顔を上げると、目の端に映った少年――ヨシュアが肩をすくめる。

「いえ、お仕事中にお邪魔してすみません」

「あー。いいんだいいんだ。けど、ちょっと待ってくれ」

手早く机の上のメモ書きを片づけてから椅子ごと向き直る。

ホテル《ブランシュ》の一室。地下にある大部屋である。

ナイアルは休暇でここに滞在しているのだが、それでも仕事はついてまわる。

――まあ、完全に休暇ってわけじゃねえしな。

「なんの記事を書いてたの？」

少年の背後に立っていた少女――エステルが言った。

「ああ、この前の空賊騒ぎのまとめだ」

「えっ。あのボースの飛行船乗っ取り事件の？　あれ、もうリベール通信で記事になってたでしょ？」

「あのなっ。ニュースってのはな、スクープを一回載せりゃ終わりってもんじゃねーの！」

「そんなもん？」

「そんなもん！」

むしろ、しっかりした記事なんてもんは、充分な取材と検証の末に書かれるものだから、第一報を載せてからが勝負だったりもするのだ。

「へー」

「なんだよ？」

「意外と真面目に記者してたんだ、って思って」

「あのなっ！」

「冗談、冗談！」

あははと笑う少女に、ナイアルは渋い顔をしてみせた。この準遊撃士に悪気がないことはわかっているが、それでも多少はおとなの威厳ってものを見せねえと。

苦虫を噛んでみせてから、ナイアルは先ほど片耳で聞いていたヨシュアの言葉を思い出す。ええと、確かこいつら……。

「これからエア＝レッテンまで行くってのか？」

「ええ、そういうことになりそうです」

「公爵様のお迎えってやつ？」

エステルがヨシュアの言葉につけ足した――公爵？

「ああ、あの……なんだっけ？　でゅらん、とか、でろんとか」

「ぜんぜん違いますよ。というか、わざと間違えてますよね、ナイアルさん」

――ばれたか。

仮にも記者だ。いちど覚えた名前は忘れないからな。

「でも、そっちのほうがお似合いよね。でろん公爵。うん、ぴったり！」

「エステル……君もそういう……一応仮にもあれでもなんとか王族らしいんだよ？」

「おまえらふたりのほうが容赦ねえじゃねえか……」

呆れてしまう。怖いもの知らずのコンビだった。

その一応仮にも王族なデュナン公爵は、お忍びでルーアンの街に滞在していた。それが、ヨシュアたちの話によれば、エア・レッテンの関所を気に入ってしまい、籠ったまま帰ってこないらしい。

つき添いの執事が困って、公爵をどうにかしてルーアンの街に連れ戻してくれと泣きついてきた。問題ばかり起こすことで知られる公爵だが、今回も負けず劣らず我侭し放題ってことのようだ。

「そういうわけで、僕たちしばらくルーアンを離れますから」

「わざわざ伝えにきてくれたってわけか。いつ出るんだ？」

「今からよ」とエステル。

「急だな、おい！　もう、夜になるぞ」

「ほら、善は急げっていうし！」

「善か……？」

むしろあの公爵には構わないほうが世の中のためって気も

するが。

それでも根は真面目な遊撃士コンビだ。別れの挨拶もそこそこにふたりはナイアルの部屋を辞した。

扉がばたんとしまり、地下の部屋に静けさが戻る。嵐が去っていった。

明かりが薄暗くなった印象を持った。

あの、はきはきよくしゃべる少女がいなくなるといつもは気にならない寂しさが際立ってしまう。弟だというヨシュアが彼女を大切にしているのもわかるような気がするナイアルだ。

——って、柄でもねえな、俺としたことが。

まあ、静かなのはありがたい。取材のメモをもう少しまとめ——。

バン！

「センパーーーーイ！」

——るヒマはないらしい。

「先輩！先輩！先輩！先輩！　ナイアル先輩！　お久しぶりですぅ！」

「やかましい！」

扉をぶち開けて転がりこんできたヤツに怒鳴りつけた。

「おやおや？　何かご機嫌ななめですよぅ」

「うるさいんだよ、おまえは！　ホテルなんだから、ちったあ、静かにしろっ！　って、ドロシーじゃねえか……」

「あ、はい。ドロシーですよぅ。お久しぶりです、ナイアル先輩！　あの、あの、今そこでエステルちゃんとヨシュアくんとすれ違いましたよ！」

「ああ、さっきまでこの部屋にいたからな」

「はや？　あのぉ、いっしょに泊っていらしたんですか？」

「一晩だけな。部屋を追い出されたっていうんで、ここに泊めたんだよ。街をちょっと離れるって、律儀にわざわざ伝えに来てくれたってわけだ」

「なるほど」

「で、おまえは何でここにいるんだよ」

「先輩が次の街に行こうって言ったんじゃないですか」

「あれは建前だ」

あっさりそう言ったら、がっくりと肩を落とされた。まあ、出鼻はくじいておかないとな。

新米カメラマンだったドロシーのお守りはボースでの取材が終わった今、解消されたはずだった。やっとこのトンチキ娘としばし離れられたと思ったのだが……。

「いま、何かひどいことを考えませんでしたか、先輩？」

「まさか」

「そーですかぁ？」

上目使いでじとっとナイアルのほうを見上げてくる。

「だから、どうしてこんなところにいるんだよ？」

王都の本社に戻っていたはずなのに。

「あ、そーでした。ころっと忘れてました」

——あのな。

「実はですね……」

話しだそうとしたドロシーのお腹がくーっと音を立てて鳴った。

まるでその音に応えるように、ぐうとナイアルの腹も鳴る。

地下の部屋は窓がない。導力灯の明かりは昼間からずっと点いたままで、時間を示すものと言えば、先ほど聞こえたような時を告げる鐘の音だけ。

しかし、この腹具合からすると、そろそろ……。

「とりあえずメシにするか？」

「はい！」

こういうときだけは、どこかの少女に負けないくらいの笑みを浮かべるのだから、女ってやつは始末に負えないとナイアルは思う。

話は後回しにしてふたりして夕食を取ることになった。

4.

ナイアルたちが食事処として選んだのは、ホテル《ブランシュ》の近くにあるカジノバー《ラヴァンタル》だ。

二階がカジノという造りなのに静かな食事処で、天井でゆっくりと回る飾り羽車の音さえ聞こえそうなほど。そろそろ夕食時だというのに客の数も少なかった。

「これでやっていけるのでしょうか」

ドロシーが聞くので、ナイアルは答えてやった。

「客が少ないのは二階が改装中だからなんだよ」

そう聞いている。

「あ。つぶれかけているわけじゃなかったんですねぇ！」

「しぃーっ！」

なぜにカウンターに聞こえそうなテーブルでそれを言うかな、こいつは。

頼んだのは、魚のムニエルとアゼリア・ロゼ。この店では定番だという二品だった。

魚はサモーナで、どうやら海で獲れたばかりのよう。新鮮だった。衣がぱりっとしていて、ひと口大に切って口の中に放り込むと、噛んだ瞬間に脂とうまみが口の中に広がった。身も肉厚で香草の香りも効いている。

アゼリア・ロゼのほうは木の実のジュースで作ったカクテルだ。甘い飲み口だけれどしっかりお酒だから飲み易いからと油断すると酔う。

ピンク色の液体を口につけていたドロシーが、ほんにゃり

とした顔になった。頬のほうも、ややピンク色になっていた。

「美味しいですねー」

「呑み過ぎるなよ？　いいな？」

「はいー」

「信用できねえ」

「そんなことないですよー。ぜんっぜん、酔ってないですよー。あはははは。なんだか気分がよくなってきちゃいましたですよぅ」

――だめだこりゃ。

「で、話の続きだけどな。あのふたり、一度はホテルの最上階に宿を取ったはずだったんだが、デュナン公爵ってのに追い出されたってぇわけだ」

「ほへー」

ふたりというのはエステルとヨシュアのことだ。

あの姉弟の遊撃士コンビは、この街を訪れた日にホテルの最上階のスイートを取ることができた。たまたまキャンセルが出たその部屋を、遊撃士ならば普通客室料金でいいとホテル側が勧めてくれたのだ。

だが、そこにデュナン公爵が登場する。

リベール王国女王の甥にあたるという、デュナン・フォン・アウスレーゼ公爵殿は、海が眺められる部屋をお希みだとかで、お忍び旅行中の宿として強引に最上階スイートを横取りしたのだ。

宿を失ったエステルとヨシュアだったが、ちょうどそこにナイアルが居合わせた。

自分が取った部屋にはベッドも余っていたし、知らない仲でもない。

「で、ふぇんぱいが、部屋をていきょーしたんれふね」

「まあな」

ムニエルの最後の欠片を口に運びながらナイアルは言った。

それでナイアルのほうの近況報告は終わった。

「じゃ、そっちの番だ」

「そっち？　ばん？　んー。ばんばん、ばばばん、っと。あははは」

ぽやんとした顔でそんなことを言って笑いだしやがった。

「頭から水かぶせっぞ！　だからなんの用でルーアンまで来たのかってことだよ！」

「ああ！」

――うあ、イライラする！　天然が酔うとうぜぇ。思考のクロックが三分の一くらいになってるんじゃねーか、こいつ！

「そうだったのでした！　ええと、先輩に極秘指令が下ったですよぅ」

「はっ？」

極秘指令？

「んっと、このポーチ……、あ、先輩、そういえば、このポーチですけど、さっき落として無くしそうになったときに、親切な後輩不良さんに拾ってもらってですねぇ――」

「その話は後で聞く。先に本社からのってやつだ！」

「せっかちさんですー。あ、ほら、これですよ」

ポーチから取り出したのは一通の封筒だった。本社の定型業務用封筒だ。白色のそっけないやつ。受け取って開いて読む。

「極秘でもなんでもないだろこれ。なになに……『ルーアン地方をお忍びで王族がひとり、旅行している。続報のための記事を送れ』？」

「わたしはカメラマンしてこいって言われましたー。ぱっと行って、ぱっと帰ってこいって」

「飛行船代がもったいねえよ。ん？　……お忍びで旅行の王族？　続報？」

「あー。わたし、今思い出しました！　どこかで聞いた名前だと思ったんです。リベール通信の4号ですね！　でろりーこーしゃく」

「溶けてるだろ、それ」

デュナン公爵のことか。そういえば自分が公爵のことを知っていたのも、リベール通信の4号に記事が載っていたからだ。ルーアン地方のどこかを旅行中と書いてあった。

どこかどころか、このルーアンの街にまさにいたわけだが。

――まーた、ゴシップ記事かよ。

だが、とナイアルは考える。これは好都合かもしれない。キノコみたいな頭に髭を生やした左右の眉毛がもう少しで繋がりそうなヘンなおじさん（エステル談）だが、同じホテルに滞在中なら、二、三枚の記事ならあっという間に……。

「ああ！」

思わずあげた大声に、目の前で船をこぎそうになっていたドロシーがびくっと身体をすくめて驚いた。

「なな、なんですか、ふぇんぱい」

「今いねえよ、そいつ！」

エステルとヨシュアがエア＝レッテンまで迎えに行ったばかりじゃないか……。

厄介なヤツほど決まって、より厄介なことを引き起こしてくれるものらしかった。

目の前であっという間につっぷして寝息を立てだした同僚のカメラマンを見ながらナイアルは思った。

俺の周りって、こんなのばっかりかよ……。

どうやら、今度の記事も簡単にはものにできそうもない。

5.

「んー！　いい朝、というか昼ですねー」
ぐーっと天に向かって両腕を突き出しドロシーは伸びをする。日差しに照らされた街並みの白さがまぶしかった。目に痛いほどだ。
ついでに頭も痛い。
カンペキに二日酔いだ。ややふらつきつつも、ドロシーは石畳を東に向かって歩いている。散歩を兼ねた街の取材のつもりだった。
「とうぶん延期では仕方ないですから」
なにしろお目当ての人物が街にいないのだ。ナイアル先輩によれば、でゅなんとか公爵は街道先のエア＝レッテンに行っているそうで、街に帰ってくるかどうかはエステルとヨシュアのふたりの頑張り次第らしい。
何をどう頑張るのかわからないが。
行き先がわかっているのならば、そのエア＝レッテンまで出向いて取材するという方法もあるはずだけれど、ナイアル先輩にはそこまでする気はないようだ。元々苦手なゴシップ記事だからか。ひょっとしたら街から離れたくない理由でもあるのかもしれない。
通りの右手に大きな橋が見えてきた。

《ラングランド大橋》。
そんな名前がついているらしい。ホテルのフロントで聞いてきた。やはり『跳ね橋』らしく、日に三回ほど中央でふたつに割れて上がるらしかった。
その光景もぜひ見てみたいものだが、今日はまず大橋の先に行ってみるつもりだ。街の南側は海や川を渡るほうの船の波止場になっている。
橋を渡り始めたところでカメラを構える。
大きな橋の上から見るルーアンの街並みを感光クオーツへと焼きつけてゆく。
空の青、川の青、河口の先に見える海の青。ぜんぶ青い色なのに、すべて違う青なのが面白かった。蒼かったり、青かったり、碧かったりするわけだ。その三つを同時にカメラに収められるのも、ルーアンならではの風景だろう。
ドロシーは写真を撮ることに夢中になった。
いつの間にか頭の痛いことなど忘れている。習え覚えた指の動きは休むことなく、切り取る光景は迷うことなく、シャッターを押す音と、見える景色を褒め称える言の葉だけが澄んだ空に向かって溶けてゆき……。
「む？」
指の動きが止まった。
ファインダーの向こうに気になる光景が映った。

橋のちょうど真ん中あたりだ。少女がひとり、うつむいた視線で川を見下ろしている。
「なんか……よくないです」
ズームしたときの表情が硬い。いや、硬いというか、暗い。思いつめたような、というやつだ。
近づいて、自分でも思いがけないことだったけれど、声をかけてしまっていた。
「あの……」
「……はい？」
のろのろとドロシーのほうに顔を向け、いぶかしげに見つめてくる。
咄嗟に、ドロシーはカメラを構えていた。レンズを彼女のほうに向け、
「笑って」
と言った。
「え？　え？　え？」
「ほら。チーズ、ですよー」
「え？　あ、あの、困ります！」
両手を顔の前に突き出して、ばたばたと手を振る。焦っている顔が可愛かった。
ドロシーはカメラを下してから、少女に向かって微笑む。
「そうそう。笑ったほうがいいですー」

「え？　あ……」
はにかんだような表情をした。ドロシーの手にあるカメラを見つめながら、
「ご旅行、ですか……」
「いえいえ。王都にあるリベール通信社という会社でカメラマンをしてます、はい」
言いながら、手にしたカメラを軽く振る。
「カメラマン？」
「はい。ドロシー・ハイアットです。といっても、まだ成り立ての新人ですよー。鬼のようにおっかない先輩記者の元で修業中の身なのです。美人さんを目にしたら、必ず褒めて写真を撮っておけってのが最初に教わったことでして。きれいな女性は王国の宝だからって。では、と鏡に向かってカメラを構えたら、しこたま殴られましたが」
一気にそうまくしたてたら、ぽかんと口を丸く開けた。
それから、ぷっと吹き出して、ふわりと微笑む。素朴な笑みは彼女によく似合っていた。
「あ、いえ、その笑って……ごめんなさい」
「いえいえー」
——嘘をついた甲斐があるというものです。先輩、鬼扱いごめんなさい！
「ええと、あの。……ユミナです」

　そう言って、ぺこりとお辞儀をする。歳は、十五、六というところだろうか。エステルちゃんと同じくらいに見える。肩まである金色の髪を左側でまとめていた。先ほどまで暗く沈んでいた琥珀色の瞳にほんの少しだけ明るさが戻っている。

「ふむ。あの……ユミナちゃん」

「は、はい」

「差し支えなければ、なぜそのような暗い顔をしていたのか話してみませんか？　わたしでよければ話を聞きますけれど」

　図々しい言いようだと自覚はあったけれど、気になってしまったのだから仕方ない。

　ユミナはためらいを見せた。

　けれど……こちらが彼女にとっては通りすがりの旅人だからだろうか、ぽつりぽつりとだが話してくれた。

6.

　ペンダントを川に落としてしまったんです。

　幼馴染みの彼からの、たったひとつの贈り物でした。

　あたしと彼は子どもの頃から一緒に育った仲だったんです。

　ルーアンの波止場が遊び場でした。

　この橋の向こうで、朝から日が落ちるまでずっとずっと一緒に遊ぶような。

　まるで犬の子どもみたいにふたりしてころころと転げ回っていたんです。真っ黒に日焼けしてしまって、あたし、男の子と間違われることもしょっちゅうでした。

　もうすこし歳をとってからは、そこまで遊ぶことはなくなってしまいましたけど。

　それで……。

　彼の家は代々漁師で、おとなになったら自分も親の後を継ぐのだと、いつもそう言っていたんです。

　彼の父も、祖父も、港一の漁師と言われたほどの釣り師で、彼自身もいずれは祖父や父の記録を塗り替えるだろうと言われていて。

　それほどの腕前だったんです。

　ところが、ひと月ほど前から彼は魚を獲ることをやめてしまった……。

　しかも、《レイヴン》という荒っぽい人たちがいっぱいいるグループにいつの間にか入ってしまって……。一日中、波止場の使われていない倉庫に入り浸って遊んでいるようになってしまって。

　あたし、何度も「何があったの？」って聞いたんです。

　でも、ちっともあたしの言葉になんて耳を貸してくれなくて……。

　もうあたしどうしていいのかわからない。

　昨日も、この場所でぼーっと考えこんでいたら、橋の上がる時間になっていることを忘れてしまって、あやうく大変なことになるところでした。大慌てで袂まで戻って。

　そうして、気づいたときにはペンダントが無くなっていたんです！

7.

「もしやと思って、橋が下りてから戻ってきたんですけれど……見つからなくて」

「じゃ、そのペンダントはひょっとして……」

　ドロシーは視線を橋の下へと向けた。

「はい、たぶん」

「落ちちゃったのかー」

　そう言ったら、ぽろり、と滴が一粒、ユミナの頬を伝って落ちた。

　あああ。

　――しまった。泣かせちゃいました。どど、どうしましょう！

「えっとえっと」

「あ、ご、ごめんなさい」

　ぐしっと袖で涙を拭ってユミナは頭を下げた。謝ることなんてない。むしろ謝りたいのはドロシーのほうだった。

　おそらく彼女にとってペンダントは単なる幼馴染みの贈り物ではないのだ。

　見ていればわかる。ユミナはその男の子のことが好きなのだ。彼女に将来の夢を語っていたその少年が不良化してしまって彼女とロクに会ってもくれなくなった。

　ペンダントを失ってしまったことが、彼との仲の終わりを示しているように思えて、それでずっとあんな瞳で川面を見つめていたのだ。

　――でも、それ、よくないですよぅ。

　思いつめている人間はちょっとしたことで過激な行動をとりがちだ。そう先輩が言っていた。王国中を飛び回ってたくさんの記事を書いてきた先輩の言葉だけに、そのあたりは信用がおけそうな気がする。

「あの……ユミナちゃん。その……元気を出して」

　ああ、こんなこと言ってもきっと意味ないですよねっ。

「はい。ありがとうございます」

「えとえと……」
——なにか、わたしにもできることはないでしょうか。
「見ず知らずの方にまで心配をおかけしてごめんなさい」
「いえ、そんなことは。そうだ。ええと、その、彼の名前は？」
不良グループに入ったばかりと言っていた。何か、きっかけがあったのかもしれない。それがわかれば……。ドロシーだって新聞社の人間だ。つまり、真相を突きとめる側の人間であるからして——。
「カイヤ、です、けど」
——あるからして、だから、そのカイヤさんが不良化したきっかけさえわかれば……。
「…………カイヤ？」
はて。
どこかで聞いた覚えがあるような。

8.

「で、俺にどうしろってんだよ」
不機嫌そうな声で言ったのはナイアル先輩で、ドロシーは彼のために魚卵の酒蒸しを自分の皿からすくって分け与えた。魚卵の酒蒸しは、ココ、南波止場にある酒場《アクアロッサ》のお勧めメニューだ。
夕食時だから、かなり混雑している。海の男らしく肌を日焼けさせた人たちがいっぱいたむろしていた。
ドロシーのおすそわけを睨みつけて先輩がつぶやく。
「なんだよ？」
「わたしのぶんもあげますから、これで知恵を貸してくださいよぅ」
「や、安い買収だな、おい！」
「そんなことありませんってば。百年ものの古酒を使った逸品だって話ですよ。わたし、酒はもう懲りましたので今日はいりませんし。ほらほら、食べるだけで身体が温まるシロモノですってー。ぽかぽかしてきちゃいますよ、きっと。百年古酒って強いお酒ですから！」
「あのな……『今日は』いりませんって、全然、懲りてねぇよ！」
「そーですか？」
「だよ！　だいたいな、俺たち記者は、記者であって遊撃士でも探偵でもねぇ！　ましてや、他人の恋愛ごとに首を突っ込むのなんて俺はごめんだぞ」
ロクなことにならない、なんて先輩は言うのだ。
ドロシーとしては、それを聞いても引き下がるわけにいかない。あの、ぽろっと零れた彼女の涙を先輩ってば見てないのだ。きゅんときた。こっちの胸まで痛くなった。あれを見て、なお、何もしないという選択肢はドロシーの中になかった。

「あのなぁ……」
「カイヤさんが不良化したのにはきっと理由があると思うんですよぅ。だって、そうじゃないと、あんなにカワイイ幼馴染みを放っておくなんてありえないですー。敏腕記者のナイアル・バーンズだったら調べられますすってば！」
「可愛いはおまえの個人的見解だろ！」
「そんなことないです！　ほらほら！」
ここぞとばかりにドロシーはカメラを取り出した。
記憶子に焼きつけた映像をオーバルカメラの背面にある投影版に映して見せる。
両手を顔の前に突き出し、照れた表情を浮かべたユミナの顔をアップにしてから、先輩のほうに向けた。
じっと見つめた先輩の唇が閉じた。む、と口をへの字に曲げる。これはドロシーの主張を認めた証だ。
それを見てから、ドロシーは背面の操作盤を指で撫でて、もう一枚の写真を投影版に引っ張ってきた。
「実はですねー。わたし、ユミナさんから彼の名前を聞いたときに、聞き覚えがあることに気づいたんです」
ナイアル先輩は口を閉じたまま聞いている。
「カイヤ、って、彼も呼ばれてました」
くるっとカメラの投影版を先輩に向ける。そこには、大橋を南に向かって駆けていく不良さんたち四人が映っている。
ドロシーにぶつかってきた男たちだ。いちばん最後尾を走るのは肌を浅黒く日焼けさせたもっとも若い少年だった。
「ほら、この子ですー。振り返ってるから、顔がわかりますよねー。この子がカイヤくんですよ！」
ということは、おそらくあの先輩不良一味が《レイヴン》なのだ。『渡りカラス』なんて恰好いい名前が似合うような人たちではなかったけれど。カイヤひとりがなんとなく浮いていたのもわかる。彼は一味に入ったばかりだからだ。
浅黒い日焼けした肌はあれは海の男だったからで……。
「……ドロシー」
いちど目を閉じてからナイアル先輩は口を開いた。
「そんなに言うなら交換条件だ」
「はい？」
「もうじきあのふたりが戻ってくる」
あのふたり、というのがエステルちゃんとヨシュアくんのことだとすぐにわかった。
「あいつらのことだからな。時間は掛からねえよ。で、だ。そうしたらあの公爵にインタビューしなきゃならねぇ」
「はいはい。そうですねー」
「ですねー、じゃねー！　おまえもたまには手伝いやがれ！　あのなっ。お忍び中の貴族がそうそう一介の記者の取材に応じてくれると思うか⁉」

「無理じゃないでしょうか」
　そう言ったら、がっくりと肩を落とされた。何か悪いことを言ったでしょうか？
「デュナン公爵ってのはな。性格がわりぃことで知られてるんだよ！　ずうっと考えてるんだが、どうやったら取材に応じてくれるか、さっぱり思いつかねえ」
「ずっと考えてたんですか？」
「ああ、ずっとだ」
「先輩！」
「なんだよ」
「やる気のないように見えて、ちゃんと考えてたんですねー」
　ぱちぱちと小さく拍手したら、ぎろりと睨まれた。
「交換条件だ。手伝って欲しけりゃ、こっちの手伝いもしやがれ！　おまえも考えてもらうぞ！　公爵にインタビューする方法を！」
　そういうことか、とドロシーは納得した。
　その、でゅなんちゃら公爵とかいう性格の悪い貴族の人から、どうにかして記事を取らねばならないのだ。
「ううん……」
　——これは難題かもですねー。
　お忍び中なのだ。そもそもルーアンにいるということだって知られたくないはず。
　しかも、聞いているかぎり、常にエラそうで威張っているような人なわけで、そういう人物が喜んで取材に応じるなんて状況はとてもじゃないが想像できない。
　だが、ここであきらめたくはない。
　真実を切り取るのがカメラマンの仕事だ。それがどんな真実だろうと。世界は美しいものだけでできているわけではない。わかっていた。
　けれど、悲しい真実はドロシーは苦手なのだ。
　ユミナの涙が脳裏に浮かぶ。
　胸の痛くなるようなコトは幸せのためのスパイスだと思いたい。状況をひっくり返したければここで諦めちゃだめだ。
　——まったく、なんでカイヤくんは子どもの頃から語っていたという漁師になる夢を捨ててしまったのでしょうか？
　ん？　漁師？
　閃いた！
「釣り……はどうでしょうか、先輩」
「はあ？」
　ナニヲイッテルンダコイツハ。
　ナイアルの顔つきがそう言っていた。
「だからですねー。こっちが勝手に記事にするんじゃなくて、

向こうが記事にして欲しいって頼んでくれればいいわけですよぅ」
「……どうやって？」
「釣りです！　すんごい獲物を釣れば、向こうから記事にしてくれって言ってくるんじゃないでしょうか！」
　ドロシーには確信があった。
　王族を笠にきて威張り散らすような輩だ。自尊心は山より高いに違いない。そんな人物が大物を釣り上げて自慢するのを抑えられるだろうか？
　できない、とドロシーは睨んだ。
「いや、そうは言うけどよ。公爵が釣り上手だなんて話は聞いたことがねえぞ？」
「だから助手をつけるんです。釣り名人を助手にすれば、大物を釣れる可能性が広がりますよねー」
「釣り名人ー？」
　そんなのどこにいるんだよ、とナイアルが乗ってきて、心の中でにやりとドロシーは悪い笑みを浮かべた。よし、かかった！
「ひとり、わたし、知ってるんですよー。しかも、この港で一番の漁師です！」

（続く）

小説版 零の軌跡 ショートストーリーズ

エリィの章（前編）

田沢　大典

†

あの日から、私の世界には色がない。父が家を出た後、母が実家である帝国の地方都市に戻っていった日から。

母が私をクロスベルに置いていくと言い残し、私はそれを素直に受け入れた。父がいなくなってからの母は子どもの私から見てもつらいほど疲弊していたし、このままでは本当に「ダメになってしまう」と思ったから。

でも、おじいさまの家に連れてこられたあの日から、私の世界には色がなくなってしまった。そう、本当に色がないのだ。

色鮮やかに咲いていたマリーゴールドの花も、毎朝お手伝いさんが入れてくれる紅茶も、見上げる度に晴れやかな気分になるはずの空も、すべてがモノトーン。

でも、別になにも不都合はなかった。文字は読めたし、ご飯も食べられる。ただ、世界に色がない、それだけだ。

お医者様に見てもらおうかとも思ったけれど、家に来たばかりでおじいさまに迷惑をかけるのもどうなのかと思ったので、控えておいた。

ただひとつ不都合があるとしたら、おじいさまに花や絵画を指し示されて、ごらんエリィ、美しいだろう？　と問われた時だけ。色がないというのは、これほどまでに味気なく、美しさというものをはいでしまうのかと思えた。でもそれもすぐに「ええ、おじいさま」と言えば問題はないのだと気づいた。

そうして私は日々を暮らしていた。ただ、ひとりきりのモノトーンの世界の中で。

‡

我が家の地下には、代々の当主とバトラーしか知らない、秘密の部屋がある。

ワインセラーの奥にある隠し扉を抜けた先にあるその部屋は少々かび臭いものの、不思議と落ち着く空気があった。

導力ランプのほのかな明かりにぼうっと照らし出されたその部屋の壁の一面には本棚が並び、いつの時代のものとも知れぬほど古めかしい本が並ぶ。反対側には、フラスコやアルコールランプ（導力を使わない、とんでもない年代物！）が並び、まるで実験室のような様相だ。

そう、ここは実験室だった。錬金術の。

クロイス家の代々の当主は、次の当主に錬金術の秘技を教える。そうして何世代にもわたって秘技を受け継ぎ、常人が一代ではたどり着けない高みに至るのだ。

そして私、マリアベル・クロイスも例に漏れず、錬金術の秘技を学んでいた。

最初は父、ディーター・クロイスから教えられた。錬金術の基礎の基礎。物質・触媒・変化・錬成……これらを私はあっという間に理解してしまった。父は私を天才だと褒めそやした。

そう、確かに私は天才だったのだろう。現に、父の教えではすぐに満足できなくなり、自分で本棚に埋まっていた書物を取りだし、読みふけるようになった。こうなっては、父の出番はない。私は夜な夜なひとりで、秘密の地下室に籠もるようになった。

残念ながら、父は天才ではなかった。いや、錬金術の才能においては凡庸以下と言ってもいい。でも父は商売人としての才覚は充分以上にあった。錬金術を学びながらも、導力革命の機運をすぐに察知し、自身が持てる金銭と人材をそこに投入した。おかげでクロイス家は父の代で一気に反映し、私はこうしてなんの苦労もなく暮らすことができる。

それに父は私を愛してくれている。普通の父娘の関係以上に愛情を注いでくれていることは、買ってもらえるドレスの数や、受けた教育の質・量を見てもあきらかだった。おかげでこうして、子どもとは思えないほど大人びた思考もできるのだから。

ただ、それと錬金術の才能は、まったく別だ。そしてクロイス家当主に本当に必要なのは、その父が持ち得なかった才能であることも、また。

本棚に詰め込まれた書物を読みあさり、気づいたことがあ

る。書物に書き込まれたメモの数々。あるいは、何代か前の当主がまとめたであろうノートに、さらに別の当主が注釈を書き加えたもの。その内容は様々であったが、彼らの想いは共通していた。

高みへ。遙かなる高みへ。

父が最初に言っていた『クロイス家の使命』。しかしそれを実感したのは父の言葉ではなく、この秘密の部屋にため込まれた、膨大な先代たちの執念すら感じる記録からだった。

そして彼らがその高みを目指したのも、よく分かる。現実とはなんともつまらなく、人々はなんとも愚かしい。もちろん彼らは優しく、温かく、愛すべき存在なのかもしれない。しかし人は時に度しがたいほど愚かで残酷だ。彼らにつき合い続けていれば、永遠に地べたを這いずり回り、遙かな高みなど目指しようもない、と最近強く思うようになっていた。

……なんてことを日々考えているけれど。こんなこと、誰にも言えっこない。言ったところで大人たちは怪訝な顔をするだけだし、ましてや同じ年の子どもたちには、理解もできないだろう！

だからといって、それをとがめるつもりはない。彼らには無理なのだ。それが現実。

ただ、時々無性につまらなくなる。この世界に、私の心をときめかせるものは、錬金術以外には何もないのだと思い知ることが。

†

おじいさまの誘いで、パーティーへとやってきた。

「同じ年の子どもたちも来る。友だちができるかもしれない」

おじいさまはそういってくれたが、あの子たちは私などには興味がないようだった。

そんなものだ。私だって、見ず知らずの子がいきなり来て「友だちになりなさい」なんて言われても困ってしまう。

特にその子が、ただ黙って困ったような笑顔を向けるだけなら、なおさらだ。

結局その子たちは私と二言三言かわしただけで、すぐにどこかに言ってしまった。

「今日もごきげんとり」

などと言っていた気がするので、お小遣いをくれるようなお金持ちのおじさんでもいるのだろうか。

私はひとりで壁際に立ち、料理を少しずつ食べていた。たぶんおいしい料理なのだろうが、なにせ色がついてないので、気分的には炭でも食べているような感じだ。

たまに優しげな若者や、世話好きなおばさまが声をかけてくれるが、私が名乗ると、その髪の色を見て、わずかに眉を

ひそめたり、口角が微妙に上がる。そしてすぐに、「ひとりでつまらなくないかい？」とか「パーティーを楽しんでいってね」などと当たり障りのないことを言って立ち去るのだ。

こういう時、私はいやでも自分の生まれを考える。現クロスベル市長の孫であり、失脚し国を追われた元政治家の娘。それがこの場での私であり、エリィというひとりの女の子のことなど、どうでもいいのだと。

そんなことを考えていたら、食べていた料理がますます味がしなくなってきた。

もういいや、と食べかけのお皿を置き、私はきらびやかなパーティー会場を抜け出した。廊下は部屋の中とは打って変わって静かで、人気のなさと相まってとても居心地のよい空間だった。

でも、ちょっと広すぎて落ち着かないな。そう思いながら、廊下に据えつけてあったいすに腰掛ける。ようやく一息つけたような気がして、私はふう、とため息をついた。

‡

うるさい。

私はそう心の中で吐き捨てた。

パーティー会場はにぎやかを通り越してただ騒音を垂れ流すスピーカーのようだった。

部屋はゴージャスという意味を取り違えた花でかざられ、無駄に見栄えに凝った料理が大皿に並び、年甲斐もなくキラキラしたドレスを着飾ったおばさまたちがケタケタと笑う。

なんと醜悪な極彩色の世界だろう。

美しい花々も、きらびやかなドレスも、私には何の価値もない。極彩色の世界はただうるさく、煩わしい。なぜ静謐で美しいものがないのだろう。地下室にある結晶標本のように、単色でありながら、目もくらむような美しさを感じさせるものがないのだろう。

なんともつまらない世界だ。

そして私のまわりでおべんちゃらを並び立てる、同じ年ぐらいの子どもたち。

彼らは親に言われて、私に取り入ろうとしているのだろう。

それはさぞ効果的なのだろう。

私が天才でなければ。

なにせ私のお父親は、飛ぶ鳥を落とす勢いで成長を続けるＩＢＣ（クロスベル国際銀行）の総裁だ。

次々と伝統ある企業や商店を買収し、資金援助し、成長させる。その手法は新世代の寵児だともてはやされていた。そう、お父様はお金を稼ぐことにかけては天下一品なのだ。

そんなＩＢＣ総裁の娘に取り入ってコネクションを作り、

恩恵にあずかりたいという人間は山ほどいる。

　そして子どもには子ども同士の方が仲良くできるはずだ、と思いこむ。

　なんと浅はかな思考だろう。

　そうでなくても、子どもというのは演技ができない。「親に言われていやいやつきあっている」と顔に書いてあるようなものだ。そんな相手と話していて、気持ちがよいはずもない。いくら子どもだからといっても人をバカにしすぎている。

　しかしそれでも彼らは必死だ。親に気に入られたいかいから？　おもちゃを買ってもらえるから？　事情は知らない。けど、私がそれにつきあう必要もまた、ありはしない。

「マリアベルちゃん、今日もキレイね！」

「ねぇマリアベルさん、今度ピアノを聴きにこない？　僕のお母様がとても上手でね。きっと気に入ると思うんだ」

「ずるいわ、私もマリアベルさんをおうちにご招待したいのに。ねね、私の家にはバラ園があるのよ！　色とりどりのバラがね」

　私はすっと立ち上がった。彼らの口が止まり、視線が私の顔に集まる。その間抜けな顔をゆっくりと眺め回し、

「申し訳ありません。少々用事がありますので、これで失礼いたしますわ」

　そう言って立ち去った。むろん、追ってくるものなどいない。ここで追ってくるような空気の読めない子どもは、私に取り入るなどという高度なことはできないからだ。

　らんちき騒ぎを続ける会場から一歩廊下に足を踏み出す。会場への扉が閉まると、騒ぎも遠くさざめきのように聞こえてきて、これならかんに障ることもないな、と思えた。

　それにしても、と廊下の真ん中で立ち尽くす。

「用事って、なんなのかしら」

　そうひとりつぶやいて、クスリと笑う。そう、別に用事などないのだ。ただひとりきりになりたかっただけ。

　廊下をゆっくりと歩くと、毛足の長いカーペットに靴が埋もれて、これはこれで悪くない感触だった。

　わずかに香る、少し湿った臭いはこの建物からだろうか。古さの証だが、嫌いではなかった。むしろここは、秘密の地下室を思い起こさせる。

　私は少し愉快になりつつも、急にあの地下室に行きたくなった。

　しかしそのためには帰らなくてはいけない。さすがにパーティーはまだ中盤、お父様は今帰るわけにはいかないだろう。なんとかひとりで帰らせてもらえないだろうか？　少し具合が悪いと演技をする？　いやしかし、そんなことをすればきっとお父様は私についてきてしまう。その程度には溺愛されていることを認識しているし、そのことがうれしかったりもするのだ。

　そんな時に、きらり、と何かの輝きが目に飛び込んできた。なんだろう？　一瞬だったが、とても美しく、それでいてけばけばしくない、透明感すら感じるようなきらめきだった気がする。

　そう思いながら光を感じた方を見ると、一体の等身大の人形がイスに置かれていた。

　まず目に飛び込んだのは、美しいパールグレイの髪。そして整えられた顔立ち。目を閉じるタイプの顔は珍しかったけれど、そういうタイプのドールも見たことがあったから別段気にならなかった。というよりも、あまりの美しさにそんなことなど気にならなかった。

　けばけばし過ぎる極彩色の世界の中で、その人形だけがひんやりとした真珠の輝きをまとい、シンプルにして繊細な美しさを持っていたからだ。それは私の世界になかったもの。欠けていたものそのものだった。

　私はふらふらと、その人形に吸い寄せられるように近づいた。近くで見ると、衣装もかなり良いものだと気づいた。決して華美ではないが、上等な生地が使われている。このドールの持ち主は、さぞ大事にしているのだろう、ということがわかる。

　それにしても、と私はドールの顔にキスせんばかりに近づきながら思う。目を閉じているだけでこれだけ美しいのだ。目を開けたら、さぞ美しいのだろう、と。下手をしたら、恋をしてしまうかもしれないほどに。私の家には、お店が開けるほどのドールがあるけれど、かわいいと思いこそすれ、恋をしてしまうほどのものは未だお目にかかっていなかった。

　そう、もしかしたらこれは、運命の出会いなのかもしれない。だとしたら、なんとしても家に連れて帰らなくては！　この家の主とお父様は懇意だったかしら？　いいえ、たとえ懇意でなかったとしても、してみせる！　そのためには手段など選んでいられない！

と、意気込んで鼻息を荒くしていたら。

　すうっと、人形の目が開いた。

　美しい髪の毛と同じ、真珠色の瞳。まるで生気を持ったかのような、理知的でキラキラとした瞳。

　ああ、いけませんわ。

　そう思った時にはもう遅い。私は、恋に落ちてしまった。

†

　気づいたら、うとうととしてしまっていたらしい。人の気配というか、息づかいに気づいて目を開ける。ぼんやりとした頭で、目の前にあるものは何かと考える。

そこにいたのは、見事な黄金の髪の毛を持ち、驚くほど大きな瞳を持つ、可憐な女の子だった。

「あ……」

「……あ？」

「あなた……人形じゃ、ありませんの？」

女の子の第一声、その内容を理解するのに、少し時間がかかった。

「人形……？」

どこかに人形でもあるのだろうか。私がここに座った時には、なにも置いていなかった気がするけど。

「ごめんなさい、よく分からないのだけど」

ぼーっとしている様子の女の子を見て、ちょっと不安になってきた。

「あの……もしかして、あなたのお人形がここにあったのかしら？　見かけなかったけど……もしよかったら、一緒に」

探しましょうか、と言いかけたところで、彼女がガッと手を掴んできた。文字通り、ガッと。

「お名前は!?」

「え？」

「お名前、なんと言いますの!?」

「え……エリィ、よ」

マクダエルの名前を出そうかと少し迷っている間に、彼女がしゃべりだした。

「エリィ……ああ、なんと美しい名前でしょう！　気品がありながら愛らしく、まさにあなたにぴったりの名前ですわ！」

自分の名前をこんな風に褒められたことがなかった私は、うれしくなる前に驚いてしまった。おそらく目をぱちくりさせていたであろう私に向かって、彼女が続ける。

「私の名前はマリアベル。マリアベル・クロイスですわ」

「マリアベル・クロイス」

「ええ！」

クロイス、という名前に聞き覚えがあった。確かそれは、最近頻繁に新聞に出ていたような。

しかし、私が思考する前に、彼女の声に遮られてしまった。

「ベル、と呼んでくださいな」

「えっ」

「だって私たち、お友だちでしょう？」

いつの間にお友だちになったのだろう。ついさっき出会ったばかりだと思うのだが。

「さ、呼んでくださいな、ベルって」

「でも、マリアベルさん」

「もう、ベルですわ！」

ちょっと拗ねたように頬を膨らませる。さっきから見ているけど、驚くほど表情がコロコロと変わる子だ。そしてその表情どれもが生気にあふれ、まぶしいぐらいだ。黄金の髪の毛も、やや紅潮した頬も、彼女のあふれる生命力を表している。

と、そこで気づいた。

「色……」

色がついているのだ、彼女には。もしかして、とあたりを見回したけど、相変わらずまわりはモノトーンの世界だ。

「どうなさったんですの？　急にキョロキョロと」

そう言ってきた彼女をじっと見つめる。モノトーンの世界の中にひとりだけ、鮮やかに輝く色をまとった存在を。

そこで私は忘れていたことに気づく。

ああ、色があるということは、こんなにも素晴らしく、美しいのだ、と。

‡

急にあたりを見回していた彼女が、私をじっと見つめる。

そのまなざしに、ドキリと胸が高鳴る。

ああ、エリィの瞳は光の当たり方で緑がかって見えるのだな、などと、どうでもよいことを考えていた。

（それにしても……なんと美しいのでしょう。これこそまさに、私が求めていた美、そのものですわ！）

ここまで私をときめかせてくれる人がいることが、ただ純粋にうれしかった。

彼女に見とれていた私にかわって、エリィがつぶやく。

「忘れてた……」

「え？」

「ううん。あなたがとても綺麗だなって」

そう言って微笑んだ彼女の笑顔は、それはもうとびきりで。いても立ってもいられず、気づいたら私は彼女を抱きしめていた。

「ちょ、ちょっと、あの!?」

「エリィ〜！」

「あ、あの、マリアベルさん、その、こういうの、恥ずかしい……」

耳元でもじもじと言う彼女の声がこそばゆく、私はさらに強く彼女を抱きしめる。

「ベル、と呼んでください！」

「あの……」

「ベルと呼ばない限り、離しませんわ！　ふふふ……！」

そう言って私は笑う。心から笑ったのは、いつ以来だろう。

「……わかったわ。お願いだから離して、ベル」

エリィが私の愛称を呼んでくれたことを確認して、抱きついていた身体を離す。でも、今度は手をしっかりと握りしめ

た。
　少し戸惑ったような顔をしているエリィに、私はにっこりと微笑みかけた。
「それじゃあまずは、お父様にご紹介しますわ！」
「え……あっ、ちょっと！」
　エリィの返事を待たずに、彼女の手を引く。あの騒がしいだけのパーティー会場も、彼女といれば全然平気だ。
　私は空いているもう片方の手で、パーティー会場への扉を開けた。

†

　彼女に手を引かれ、パーティー会場へと舞い戻る。
　やはり世界はモノトーンだったけど、そこにひとり、色をまとった少女がいる。
　エネルギッシュで、表情豊かで、かなり強引で。
　私が色を無くしてしまってからはじめてできた、お友だちだ。

エリィの章（前編）　了

25周年メモリアルもスタート！『イース　セルセタの樹海』の最新情報が到着！

1987年6月21日に発売されたPC88『イース』から25周年メモリアルとなる2012年6月21日に、最新作『イース　セルセタの樹海』の情報が一挙公開された。今回はその最新情報をキャッチした！



はじまりの街・キャスナン

物語が始まり、アドルが最初に訪れる街がキャスナンだ。アドルはここでデュレンと再会し、自身が記憶を失った謎を探るため、再び樹海に向かうことを決意する。





その他のキャラクターや新情報は到着次第、掲載予定！　続報を待て！

MAIN CHARACTERS

主人公は18歳という若かりし頃のアドル。そして、多くの魅力的なキャラクターたちを、豪華キャスト陣が盛り上げる！



▶アドル・クリスティン
（声／梶裕貴）
後に「冒険者」として名を馳せる赤髪の青年。今作では記憶喪失の状態から冒険がスタートする。武器は剣。



▲カーナ
（声／石原夏織）
大樹に居住を構える村・コモドに暮らす少女。その戦闘能力とリーダーシップで村人の信望も厚い。武器はナイフ。



▶デュレン
（声／平田広明）
キャスナンで情報屋をしている男。どうやら記憶を失う前のアドルと出会っているようだが……？　格闘スタイルで戦う。

■製品情報

■タイトル　：イース セルセタの樹海
■英題　：Ys -Foliage Ocean in CELCETA-
■発売日　：2012年9月27日(木)発売予定
■ジャンル　：アクションRPG
■対応機種　：PlayStation®Vita専用
■プレイ人数　：1人
■税込価格　：通常版：7,140円(税込)
　イース生誕25周年記念パック：8,925円(税込)
■CEROレーティング：審査予定

※画面は開発中のものです。

人生半キャラずらし

jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

『Wanderers From Ys SUPER ARRANGE VERSION』





岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

皆様こんにちは、jdkBANDドラマーのオカジです。

皆様、突然ですが、ファルコム通販をご存知ですよね？　このファルコム通販、もちろん僕がファルコムに目覚めた時にはすで存在しており、僕は小学校時代に何度か利用した事があります。当時は、ファルコムのゲームソフトを買うと、赤い通販専用の用紙が封入されており、普段では手に入らないようなレアなグッズがびっしりと書かれたこのチェックシートに胸をときめかせたものでした。

今日は、そんな夢の詰まった赤い用紙を使って、僕が生まれて初めて買ったファルコムのCDをご紹介したいと思います。

『Wanderers From Ys SUPER ARRANGE VERSION』

当時新作だった『Wanderers From Ys』を友人の家のPC-88でプレイしていた僕は、もう寝ても醒めてもこのソフトの事しか考えられません。当時としては信じられないような多重スクロールバリバリのグラフィックと、ファルコムお約束のハイクオリティな音楽に完全に魅了されきっていたのでした。

本当ならなんとかPC-88を入手して、思う存分『Wanderers From Ys』を遊びたい！……しかしさすがにいくらなんでも親にPCをねだるわけにもいかず、悶々とする毎日を過ごしていたわけですが、ここで僕はどこから入手したのか例の赤紙を手に入れます。（たしか雑誌か何かにファルコム通販の記事が載っていて、取り寄せたんじゃなかったかな……）そしてなんとか親を説得し、見事にゲットしたのが当時新発売だったこのCD。もちろん、「スーパーアレンジバージョン」とか言われても何の事やらさっぱりわからないで買ってます。「なんか凄そう！　スーパーなんとかって書いてあるし！」位の認識だったのではないでしょうか。当時初めて聴いた時も「なんか、凄い！」とは思っていたものの、今改めて聴いてみると、難波弘之氏によるアレンジの秀逸さもさることながら、参加ミュージシャンの演奏のクオリティーの高さに圧倒されます。というか、こんな豪華なミュージシャン集めて作ってたのかこれ!!って(笑)。

今でこそ、仕事で楽曲のアレンジをする事もある自分ではありますが、当時このアルバムを手に入れた事で、「アレンジ」という言葉も覚えたし、「アレンジ」とはどういうことであるのかも知ったように思います。……また、「アレンジ」という概念を知るという意味において、このアルバムの作りは秀逸だったのではないかと。

……と、いうのも1曲目の「予感=スティクス=」の作りがおもしろい。まずこのアルバムを再生すると実際ゲーム中に流れるFM音源版の楽曲が暫くの間続きます。そこでリスナーは「あれ、どこがスーパーアレンジなんだ？」と思うわけですが、1分を過ぎた辺りから厚みのあるシンセ等が加わり、素晴らしいアレンジバージョンへと変貌してゆくのです。当時も「そうか、アレンジってこういう事なんだ！」と、えらく納得した覚えがあります。

もちろん他の楽曲のアレンジも素晴らしく、ジャズからハードロック、そしてシンフォニーまで盛りだくさん！　今聴いても聴き応えのある素晴らしいアルバムだと思います。皆様も機会があれば聴いてみて下さいね！



ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで
世界50ヶ国に配信中。
（ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが
適用されたiTunes Plusでの配信となります）
iTunes配信中のコラム関連アルバム情報
[Wanderers From Ys SUPER ARRANGE VERSION]
価格：900円
収録曲数：11曲

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々の
イラストとコメントを毎月お届けします！



アイサギ

重厚で渋みのある世界観と、登場人物たちの言葉を紡ぐことで見えてくる奥深い物語が好きです。人々の嘆きや叫びをその身に受けながら、主人公や仲間たちがそれぞれ求めてきたものを手にする姿に心を揺さぶられます。

『ダイナソア』(1990)

黄泉と現世の狭間・ザムハンの地で、それぞれの想いや信念の元に集まったキャラクター達の旅を描くＲＰＧ。これまでにない硬派な作風で人気が高く、「裏シナリオ」にも注目が集まった。

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

合計7000名に豪華賞品が当たる!

那由多の軌跡&零の軌跡Evolution 合同抽選会



『那由多の軌跡』＆『零の軌跡Evolution』発売記念に全国５ヶ所の店舗でソフトを購入・予約された方限定のスペシャル抽選会を実施。賞品には出演キャストの直筆サイン色紙やオリジナルグッズなどファン必見のアイテムが用意されている。日時は7月26日と28日の二日間、『那由多の軌跡』はWEB抽選会も予定しているので、詳細は公式HPをチェックして待とう。

冒険家も遊撃士も 寄っといで！

みんな集まれ!ファルコム学園

新久保だいすけが描く『月刊ファルコムマガジン』の看板四コマコミックがついに単行本で登場。ファルコム作品の新旧キャラが入り乱れる学園は今日も大騒ぎです。以前『月刊電撃マオウ』で連載された『イースvs.空の軌跡』の四コマも収録された豪華な第1巻は7月19日発売。かわいそうなことになっているダルク先生の表紙が目印だ。893円。(税込)

愛と正義で夏を乗り越えろ!

ロイドなりきりTシャツ& アイラブイースTシャツ



『零の軌跡』でロイドが着ているジャケットを再現したTシャツと、『イース』25周年を記念したTシャツがファルコム通販で絶賛発売中。背中までこだわりのデザインがプリントされたTシャツはS・M・L・LLの4サイズをご用意。「ロイドなりきりTシャツ」は3,990円、「アイラブイースTシャツ」は3,360円。(どちらも税込)

ファルコムの『今』を語る!!

Falcom Long Interview

『月刊ファルコムマガジン』に掲載された日本ファルコム株式会社・近藤季洋代表取締役社長のロングインタビューを中心に、「軌跡」シリーズのシナリオスタッフや「jdkバンド」のボーカル・小寺可南子などファルコム関係者が語ったインタビューが一冊に！ 「今だからこそ語れる」様々なトークや裏話を楽しもう。1,155円。(税込)



FB ファルコムBOOKS ファルコムブックス好評発売中!!



特務支援課メンバーの『零』までの軌跡を描く

英雄伝説 零の軌跡　四つの運命

著：田沢大典　イラスト：松竜

2010 年、2011 年に発売された日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『英雄伝説 零の軌跡』『英雄伝説 碧の軌跡』の主人公である【特務支援課】メンバー・ロイド、エリィ、ティオ、ランディの、ゲームでは語られることのなかった過去エピソードや、名シーンの裏側などが描かれた日本ファルコム公認のオフィシャル小説です。

判型：B6 正寸　**総ページ数：**320P
価格：1,155 円(税込)
発行：フィールドワイ　**発売：**メディアパル
ISBN：978-489610-215-4

剣帝・レーヴェの視点から『空』を描いたコミックス

空の軌跡外伝 レーヴェ物語

脚本：田沢大典　作画：楽時たらひ

累計販売本数100 万本を越える日本ファルコムの『軌跡』シリーズ。その人気キャラクターである《剣帝》レオンハルトが、いかにして結社に組みすることとなり、そしてその後の数奇な運命に巻き込まれていくかを描く、『空の軌跡』のアウターストーリー。



判型：A5 正寸　**総ページ数：**160P
価格：893 円(税込)
発行：フィールドワイ　**発売：**メディアパル
ISBN：978-489610-224-6

FALCOM MAGAZINE SPECIALプレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



① 1名様

❶『Falcom Long Interview』
日本ファルコムの『今』を語る！ ファルコムマガジンに掲載されたインタビューに加筆修正を加えたファン必読の１冊。



② 1名様

❷ちびみっしぃぐるみ
東京ゲームショウで配布された触り心地バツグンのみっしぃストラップ。これでみっしぃといつでも一緒!?

❸ファルコムマガジン特別出張版 Vol.3
最新作『那由多の軌跡』と『英雄伝説 零の軌跡Evolution』を大特集した冊子版ファルコムマガジンの最新号をいち早くプレゼント！



③ 1名様

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

- ●下記のメールアドレスをご記入ください。
- ●お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
- ●右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
- ●ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
- ●希望するプレゼントの番号をご記入ください。

宛先：
件名：vol.17プレゼント係

○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

●「vol.17プレゼント係」とご記入ください。

【記事一覧】
1：『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』
2：『みんな集まれ！ファルコム学園』
3：英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット
4：英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～
5：jdkバンドドラマー・オカジの人生半キャラずらし
6：ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
7：零の軌跡 ショートストーリーズ
8：FalcomFanArt Collection
9：ファルコムニュース

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り 7月23日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊FALCOM MAGAZINE Vol.17

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社